

ORH
0083

魔界の人
〔書籍版〕

銅折葉



魔界の人

The Stranger of Devildom

TH
21
FF
オ

折葉坂三番地

折葉坂三番地

折葉坂三番地

〈ORH0083〉

魔界の人

[書籍版]

The Stranger of Devilom

銅折葉

3 魔界の人

わたしのことをいまだに「お嬢様」だなんて呼ぶあいつへ。

第1章

「記録…魔界3日目」

控えめに言って最悪。それが結論だ。

霧雨魔理沙の新たな門出の旅はわずか3日で悪夢に変わった。誰が読んでくれるとも思えんが、愚痴の一つも書きたくなる。

なにしろ一番近い魔界文化圏までは概算でも690万キロ。言っておくが最大限に甘く見積もったの計算でこれだ。やってられなくなる。

OK、わかりやすく話をまとめよう。現実を直視するのはあまりにも絶望的で死にたくなるが、こいつは大事なことだ。

私の筈が出せるのは時速60キロ。瞬間最大速度はこの際関係ない。一日に繰り出せる魔力を最大限有効活用して、長時間飛び続けられる速度の限界がこれだ。これで1日18時間飛んだとすると、1日に移動できるのは1000キロちよつとになる。ここま

5 魔界の人

では簡単だ。算数の問題だな。

さて、これを地道に毎日続ける。なんてこった。素晴らしい。努力さえすればちゃんと前に進んでくれる。報われるのが確実な努力なんて実にイージーモードだな。

その結果、一日も休まずにまっすぐ飛び続ければ、約6800日で私はめでたく魔界文明圏に到着できるってことだ。なんと所要時間たったの17年半だ。やってられるかくそつたれ。

【良いニュース】地下の倉庫に放り込まれてた荷物は大体無事だった。私は実質的に霧雨魔法店をここに持ってきている状態だ。今すぐに魔界支店が開ける。

【悪いニュース】食糧が6週間分しかない。

【告知】只今開店セール中につきパン1個で何でも売ります

【記録…魔界4日目】

目覚めは最悪。死ぬほど嫌な夢を見た上にしつかり覚えててひとしきり落ち込む。それから目の前の現実がもつと最悪なのを思い出してもうちよつと凹んだ。

どうにか気を取り直してから、午前中ずっと、荷物をひっくり返して食べられるもの

を採した。収穫はカビの生えたビスケット二箱と、ふやけた革靴4足、それに地下で培養していた苔と栽培瓶ごと持ってきたキノコがざつと40種で瓶に180本。革靴は論外として、キノコはそれなりの量だ。菌床として十分成長してる株も多いので、ちゃんと栽培して鬺ればそれなりに飢えはしのげる。

もつともこいつらをそのまま食料に回したところで10日分にも満たない。加えて半分は毒キノコだ。私にいくらか耐性があるつたって限度がある。せめて捨食の法を済ませておけば多少は話も違ったんだが。

あとは壊れて動かないミニ八卦炉に、箒にエプロン、手持ちの魔道書が50冊少し、ペインにインクに瓶に着替えに、その他諸々あれこれなどなど。腹の足しにはなりそうになりものばつかりだ。

魔界の赤茶けた砂漠は写真みたいに固定されて、何ひとつ動くものが見当たらない。昼と夜はあるみたいだが、ちゃんと24時間で一日つてわけでもなさそうだ。どっちを向いてもひたすら赤い砂漠と快晴の青空だけ、まるで書き割りみたいな空には雲も見つからない。ペンキを塗りたい壁のほうはまだ代わり映えするし人間味がある。

話し相手どころか目に付く生物すらゼロ。片付けに疲れてばーっと景色を眺めてたら2時間くらいで気が狂いそうになった。さすが魔界だ。全然人間に優しくないな。独り言

7 魔界の人

も増えるつてもんだ。

要するに。3日かけて現状把握を続けた結果、私が現在置かれた状況は絶望的で、一切合切希望がなく、全くどうしようもないということがわかった。素晴らしい進歩だ。

つまり、私はこのどうしようもない状況から生還するために、なにかしらの策を考え出さないといけないわけだ。

わかりやすく結論が出たので、今日は夕飯を食べて寝ることにする。にっちもさっちも行かないのでふて寝するとも言う。明日の私が多少はマシなことを思いつくだろうと信じて。

「記録…魔界6日目」(自動書記の羽根ペンによる記録。以下断りがない限り同様)

今日も魔界は青天なり。

流石にちよつとは落ち着いてきた。寝ても覚めても状況が変わらない以上、気が狂うつもりがないなら腹を決めるしかない。資料価値って意味ではさんざん泣き喚いていた時の事も記録に残すべきかもしれないが、ちよつと恥ずかしすぎるのでログはさつき破棄した。この自動書記は融通が利くのがいいところだな。

生きて帰るところか誰かに発見されるかどうかとも怪しいってのに、記録の保存なんかしたって——と、これは良くない考えだな。

私は生き延びるんだ。生きて幻想郷に帰る。後で見つかって恥ずかしいものは処分する権利くらいある。

よし。すべきことを整理しよう。

考えなきゃいけないのは、どうやって生き残るか、どうやって助かるかだ。

生き残るのにまず大事なのは水。次に食糧だ。この順番は覆せない。この乾いた砂漠で生き残るには、とにかく水が無いとどうしようもない。そして、水についてはひとまず心当たりがある。

さしあたって一番大きな樽にありったけの水を集めて、シロヒヨタケのフィルターを被せた。土の下で菌床を広げ、たっぷり水を蓄える菌種だ。毒や汚れを浄化する性質もある、まさにうってつけのキノコだ。今の菌株なら一日当たり6リットル、水がろ過再生できる計算になる。……こいつらが枯れなければ。

魔界の環境下で育成したことなんか一度もないので明日になったら全滅してる可能性はあるが、そうならないことに賭けるしかない。なあに、あの事故を生き抜いたんだ。いまさら確率50%なんてなんのことはない。

9 魔界の人

拾ってきたまま倉庫の隅に転がしていた廃機械の冷却水も、標本に混じってた水分も、どろどろに濁って錆びた底の底まで一滴残らずに全部絞って、約80リットル。霧雨魔法店魔界支店に存在する水はそれで全てだ。

樽の亀裂に気付かず10リットルばかり地面に飲ませたのに気付いた時はこの世を呪いたくなったが、とりあえずこれが私の命を繋ぐ。

……あんまり書きたくないが、これからはトイレのことも気にしないといけないわけだ。まったく、乙女には辛い注文だな。

とはいえ、水に関してはこれ以外にあてがないわけでもない。パチュリーのところで借りた魔法書に水を作る魔法が載っていたはずだ。ドルイド基準で0レベル魔法のアレだ。とりあえず呪文と構成要素は頭に入ってるし、再現はできるだろう。ファーガンドの魔法なんて魅魔様の授業以来試したことはないが、あれくらいのまじないなら私にも使えると思う。

では2時間目。食糧問題だ。これは目下検討中。手持ちの保存食が40食（正確には39食と半分）と、クラッカーが2箱に弾幕用の砂糖菓子20瓶ほど見つかった。すでに3食分は私の腹の中で、残りはあと36食半。

他には実験用の食菌だが、これに関しては栽培の目処が立たないので保留中。そもそ

も魔界の砂しかない穴蔵で、水も限られてるつてのにどこまでまともにキノコが育つか激しく疑問である。

とにかくできるだけ節約して、その間に何か食べるものを増やす方法を考える。普段なら丸二日何も食べないようなこともあるが、今の状況で食事を抜くのはまずい気がする。ここで餓えて乾いたら、そのまま氣力が尽きて野垂れ死ぬだろう。それはもつと後になつてからいくらでもできる。

ひとまず残り36食を並べて（半分残つたのは計算が面倒なので今食っている）、均等に3等分して日付を書き入れた。これが朝昼晩の食事になる。

どう考えてもそのうち飢えるかやけくそになつてバカ食いしそうな気がするが、少なくとも、飢餓状態で追い詰められたときよりは比較的マシな判断をしているはずの今の私がそれを止めてくれる。

あたりは一面の荒野だが、ここで狩りをして獲物を捕まえるのは望み薄だ。火薬やら銃もあるにはあるが、漂着から約一週間、洞窟の外には本当にマジでなにひとつ生き物の痕跡がない。一週間前に砂の上に付けた足跡がほとんど崩れもせずそのまま残っているのを見て本格的にそう理解した。

つまり、ここで食料が尽きるまで過ごして、誰か（あるいは何者か。この際幽霊でも宇

宙人でもなんでもいい)の助けがある可能性は、流れ星に三連続でぶつかるより低そう
だ。食べられそうな生き物がやってくる可能性はそれより幾分か高いだろうが、それ
にしたって期待をかけられるような勝率じゃない。

というわけで、私は今悩んでいる。現状は最悪中の最悪だと思うが、これを最悪から二
番目程度にするために、この洞窟を引き払って移動するべきかどうかだ。

洞窟の周辺はざっと探索してあるが、確認範囲はせいぜい数キロ。今のところ見落と
しているだけで、もつと住みやすい場所が近くに(数十キロとか数百キロ圏内に)ある可
能性は否定できない。もつとも、今の環境が本当の最悪よりもずっとマシな幸運の結果
である可能性だって、同じくらい否定できないわけだが。

……正直、時間にそう余裕はない。明日か明後日には、決断をしないと。

「記録…魔界7日目」

魔界に来て一週間が過ぎた。すごいな。まったく嬉しくもなんともない記念日だ。まず
間違いない1ヶ月記念も一周年記念も嬉しくないだろうと断言できる。一年も絶対に居
たことはないけど。

朝からずつと単純作業続きでいい加減嫌になってきたので、気分転換にあの日のことをまとめておくことにする。こういうときペンを持たなくても記録できるのは楽だな。

あの日。一週間前の今日。私がここに放り出されることになった経緯だ。私は笑えるくらい不幸の連続で死にかけ、もつと笑えるくらいの幸運の連続で生き延びた。

そもそものきっかけは魔界への短期留学だった。

私はいつものように工房で魔法の実験をしていて（そしてちよつとばかり派手に材料を燃やしてしまい）本棚を3つほど吹き飛ばした。その散らばった魔道書の間から、懐かしいものが出てきたのだ。

魔界の観光会社によるパンフレットだ。ずっと昔に、向こうの連中と揉めた時にもらつて、そのまま捨てずにしまい込んでいたやつだ。

今さら中身をちゃんと読んでみたのは、興味があつたから。

もともと、魔界はもう一度ちゃんと見ておきたいと思つていた場所だったし、魔法使について種族について調べておくの必要かと考えていた。素直に白状すれば、白蓮のことか、四季異変の時に絶対秘神に勧誘された件も関係なくはない。

だからまあ、これも何かの巡り合わせだと思つたんだ。

ひとまず月一の定例会で話題に出してみたら、アリスからわりと本気で留学を進めら

れた。なんなら魔界大学の紹介状を書くともで言い出す始末。あいつああいう時だけ早口になるからすぐわかりやすいよな。パチュリーは終始怪訝な顔だったが、少なくとも反対はされなかった。半人前が思い上がるんじゃないって皮肉の一つくらいあるだろうと思つたので、こつちも拍子抜けだった。

要するにあいつら、普段は口には出さないけど、自分と同類の種族魔法使いが欲しくて仕方ないらしい。魔界に行けば私もそうなるだろうと考えてるみたいで、渡りに船だつてことなんだろう。

まあそんなわけで、すいすい準備が進んで渡界の準備をすることになった。以前に魔界に繋がっていた穴は霊夢がしっかり封印してくれやがっているので、今回は他の方法を試すことになる。

ちょうど例のパンフレットに転移門の魔法陣が織り込まれていた（今考えてみるとあんな高度でレアな術式を使い捨て前提で宣伝代わりに配って回るあたり、やつぱり魔界人つて連中は頭がちよいとどうかしてる）、これをベースに術式を組み立てて、向こうの首都への通路を繋ぐ。向こうでの手続きはアリスが担当してくれた。

途中から白蓮やら成美も応援に来てくれて、あれこれと世話を焼かれた。どこで聞きつけたか知らないが、どいつもこいつもお節介ばかりだ。

そうして1週間前の今日。私は魔界への転送門をくぐる日を迎えた。留学たった期間はずっと4週間。半分は魔界大学への体験入学、もう半分は現地観光だ。ちよつとした旅行のようなもんだと考えていた。この瞬間までは。

展開した魔法門の起動を確認し、別れの挨拶を済ませ、一步を踏み込む。

その時突然、足元がぐんと持ち上げられて、私はその場で縦向きに一回転した。後頭部が地面に叩き付けられたので、その痛みは覚えている。顔面からじゃなくて良かったと言っておくべきかな。

直後、私の意識は途切れて、気づいた時には赤茶けた空とのっぺり水色の空の下に放り出されていたわけだ。何がどうなったか、まったく訳がわからなかったが、実のところ今もよくわかっていない。

ともあれ地面に叩き付けられるまでに身動きできたのは奇跡に近いかもしれない。粉々に砕けた工房が地下の岩盤ごと吹き飛ばされ、瓦礫と一緒に砂だらけの荒れ地に上空数十メートル放り出されて、骨の一つも折れなかったのは運が良かったという他はないだろう。全身痣だらけで、しばらく耳も聞こえなかったし、手も足も腹も痛くて、とてもそんな幸運に感謝する気にはなれなかったが。

何が原因でこうなったかは、一応推測がついている。

パンフレットが古かったんだ。魔界への直通経路を開いていたはずのパテントの契約期間が切れて、転移用の経路^{パス}が使えなくなっていた。ところが私がそれを知らずに魔法陣にいろいろ書き足したもんだから、行き止まりになっていた経路の位相がズレて混線して、本来あり得ない場所へのゲートが接続された。異常を検知する安全回路も作動しなかった。……面倒だから8つのうち3つしか設置しなかった私がアホなんだが。

で、こうして開いたイレギュラーの転送門。これはすぐさま幻想郷の大結界に異常と検知されて、即座に転送経路に遮断処置が行われた。もしかしたら魔界の側でも似たようなことがあったかもしれない。

二つの世界を繋ぐ門を閉じた場合、そこには恒常力が——元々あった世界を元の形にするような力が働く。その瞬間に、渡界切符に名前の記載されていた私は（私の所有物ごと）魔界の側の存在だと認識されて、そっち側に吸い出された。まあ、そりやそうだな。魔界の契約書に滞在の意思を記していたわけだからな。この時点でどっちに所属するかって言われたらそうなるだろう。

さすが博麗大結界。この処理は、ゼロコンマ何秒もなかったにも関わらず極めて正確で、うんざりするくらい丁寧だった。あの場に居たはずのアリスやパチュリーたちを、完璧に除外してくれやがったわけだ。魔界に放り出されたのは霧雨魔理沙とその所有物だ

け。それ以外のものは一つもない。顔見知りだろうとかそんなのは一切お構いなしだ。あそこには借りてきた魔道書だって、預かってたマジックアイテムだってたくさんあったのに、ここにはページの切れ端すら見当たらない。

つまり。私はこの魔界の果ての荒野に、ひとりぼっちで放り出されてしまった。食料はあと10日と少しだけ保つ。水もロクにない。あたりには他人どころか生き物の気配すらない。一番近い魔界文明圏までは、最大に甘く見積もって690万キロ。辿り着くには少なくとも17年かかる。

水が尽きれば死ぬ。そうでなくても食べるものがなくなれば死ぬ。どこかに行こうにも、その前に野垂れ死ぬ。全部を諦めたところでやつぱり死ぬ。

ああ、くそ。最悪だ。

【記録…魔界9日目】

長い長い計算が終わった。前置き抜きにして結論を出す。

手元にある食糧をどう引き伸ばしたところで、せいぜい悪足掻き。手元にある食糧が尽きたら私は餓えて死ぬ。あれこれ無茶をして食い繋いでも、生き延びてせいぜい半年。

180日もすれば干からびて死ぬ。以上だ。

とにかく栄養が足りない。生き延びるためのカロリーが圧倒的に不足している。

魔法の森のキノコにはちよつとばかり特殊なものがあつて、必須栄養素とかたんぱく質の代わりになる成分を含んでるやつもある。けど、それにしたつて全面的に芋や肉の代わりになるような代物じゃない。生で食べる場合、100グラム当たりせいぜい30キロカロリー。一般的な乙女が生存に必要な最低限の一日1500キロカロリーを確保するには、毎日5キログラムはキノコを食らなきゃならない計算だ。その速度で食菌の生育を続けるのは無茶があるし、第一食い切る自信もない。1日5キロつてことは一週間で私は全部キノコになつちまうつてことだしな。

まあキノコの大半は水分だから、乾燥させてから齧ればいくらかマシにはなるだろうが――それにしたつて、ただこの洞窟で生き延びていくだけにしかない。私が目指すべきはこのクソツタレな無人の荒野からの脱出であつて、この洞窟でいつまでも幸せに暮らして天寿を全うすることじゃないんだ。

とはいえ、食菌だつて立派な栄養素だ。その気になれば、保存食の他に追加で数十日分の栄養を確保できる目算は私にとって朗報だ。可能な限りという条件付きで、栽培は進めていくべきだろう。幸いにして魔界の洞窟はキノコの育成には最悪の環境というほど

ではなく、まあまあそれなりに栽培はできている。腐生菌に限って言えば肥料の問題もクリア。何もしていないよりはマシ、というくらい状況ではあるが。

ということで、引越計画は保留。ここより確実にいい条件の物件が見つかるまでは、軽率な判断はかえって後悔するだろう。

そういうことにする。

水の再生利用システムは比較的順調だ。シロヒヨタケの活躍のおかげで、6リットル消費した水は4リットル返ってくる。驚きの効率66%。つまり1日に2リットルずつ干上がっている。持ち込んだ水が切れて死ぬのは約30日後だ。

消費した水を全部回収するのは不可能だ。この洞窟は閉鎖系じゃないし、あれやこれやで汚水を全部回収しても、蒸発や呼吸で失われる水は防ぎようがない。つまり飢えて死ぬよりは渴いて死ぬ方が先だ。それに、この閉鎖系でキノコを栽培するにはやっぱり水が要る。

とにかく水だ。この乾いた砂漠で井戸を掘るなんて正気の沙汰じゃない。どうにかして魔法で解決するしかないわけだ。

様式も流派も違うとか言ってられない。根性見せるしかないな。

『記録…魔界19日目』

奇跡だ。なんと取り組みはじめてたった10日ちよいで魔法がまともに機能した。もう一度やれって言われても絶対にできない自信があるぜ。さすが私。

《クリエイト・ウォーター》。何もない空間から湧き出した水をまともに浴びて、私はもうひたすらにしばらく笑い転げていた。何日ぶりの洗顔をだろうな。まったく乙女には辛い環境だぜ。

フアーガンドの魔法は魔素を吸い上げる必要もなく、術者の魔力にも依存せず、魔術書から契約した魔法をスロットに準備して起動する仕組みだ。構成要素ポーチと焦点具で作動し、0レベル魔法の使用回数は1日に3回まで。1回6リットルの水と呼べるので、1日では計18リットルの水が得られる。

ワオ。つまりポーチが壊れたらやつぱり死ぬ。最高だな。

さあ、この水を一滴だって無駄にはできない。ひび割れた樽に突っ込んで地面に飲ませてやる余裕なんかあるわけないので、十分に育ったシロヒヨタケのフィルターごと、バルクレス・ウエイトレス・パツク二重底の魔法の鞆に突っ込んだ。

これで水は溜め放題。シロヒヨタケが生きてる限り、再生して飲料水として使うこと

もできる。四次元ポケットは使えなくなつたが、理想的な水の確保には成功したわけだ。

どうしてここまで他のことをほっぽり出して水にこだわるかと言えば、あと5日分しかない食料を無視して生き延びる方法にいくらか希望が見えたからだ。飢え死によりはそこそこマシって程度だ。

私は研究熱心で注意深いことには定評があるので、地下室ごと持ち込んだ菌糸の中に、ナラクカケラの胞子があるの思い出したのだ。

いや、正直に言おう。この方法は、魔界に放り出された次の日には思いついていたが、実行する度胸がなかった。

だが日に日に減り続ける食料を目の当たりにして、もう四の五の言つてる場合じゃないことを思い知った。今回の件で食べ物をどうにかする魔法を完成させるには、1ヶ月かけても無理だつてわかつたし、ビスケットの半分を砂にぶちまけて落ち込んだのが決定打だったとも言う。

ナラクカケラは地底の辺鄙な地域に生える地獄由来のキノコで、死体に取りつく黴と粘菌の合成体みたいな植物だ。だから正確にはキノコとは言いがたいが、まあ正確な分類の話はこれの際どうでもいい。

こいつは死体に——正確には死にかけの、いままさに死のうとしている生き物に寄生

する。自力で動けない弱った生物に寄生して、そいつの体内に伸ばした菌糸で生物の神経系を乗っ取り、肉体を支配して強制的に動かす寄生生命体だ。寄生部位の内には粘菌に似たネットワークを形成して、植物なのになんか高度な知識も保っているらしい（その内容を読み取ることができないので、本当に知性があるかについては推測にとどまる段階のようだが）。

こうしてナラクカケラは死ぬ間際の生物を操縦し、自分の生えていた植生から抜けだし、はるか遠くまで移動して生活圏を広げる。乗っ取られた生物は死ぬ間際に残った命を一滴残らず搾り取られ、文字通り死ぬまで移動のために使い潰されるのだ。

昔これが広まった地方じゃ、ゾンビパニックが起きて大騒ぎになったらしい。よつばど弱らないと哺乳類への寄生は起きないし、燃やせば死ぬので被害はそこまで大きくならなかったそうだが。

……ああそうだ。私はこいつを自分に植えるつもりだ。

正気の沙汰じゃないが、記録を読む限り寄生された人間には自我もあったし、キノコの操作を無視して自立での動作もできたって話だ。それなりに希望はある。

これまで毎日、飽きるくらいキノコと生きてきたんだ。キノコ人間になるなんて本懐じゃないか。まさかこんな理由で人間やめるとは思わなかったけどな。

嘘だ。一応目算はある。私には魔法の森で暮らせるだけの毒への抗体がある。いざとなれば菌糸の侵食の進行を遅らせる毒素もある。これは毒なんだから私にも効くが、寄生の速度をある程度コントロールはできるだろう。

ナラクカケラは魔素が薄い地域でもしぶとく生き残るし、寄生先が弱って死にそうになつていればその分、自分の栄養を吐き出してでも守ろうとする。

地底の、火山の地熱でネズミが焼け焦げるような場所にも生えるキノコだ。すぐに弱って死ぬことはないだろう。寄生先が使えるうちなら、完全に壊れて潰れる前に、少しでも有効に使ってやろうとする程度の話だが、これで見事、何も食わなくても生きていくようになるってことだ。

まったく、魔法使いになる予定がキノコ人間に変更だなんて、私の悪運も大したもんじゃないか。

第2章

〔記録…魔界21日目〕

準備は整った。寄生させる位置はひとまず左腕の二の腕内側。骨と腱の位地が遠いので、すぐに腕が使えなくなることはないだろう。

背中や腹も考えたが、あとで切り落とすときに菌糸が臓器にまで達してゐるのはごつとしないし、簞が壊れたりすればどうしたって歩かなきゃならないから、脚も不自由にはできない。優先順位だ。さらば左腕。

という具合で、実はもう昨日のうちに作業はすっかり終わつてゐるんだが、今日はもう半日、ずつとよいドンの状況のまま何にもできていない。早いところ済ませて、ほかの作業をしなきゃならないつてのにな。

けど、まあ。どれだけ言い訳しても、正気の沙汰じゃないのは確かだ。ナラクカケラの寄生つてのは、要するに遠回りな自殺だからな。

……もしかしたらこれが最後の日記になるかもしれないって思うと、やっぱりそう簡単にはいかない。くそ。弱音なんか吐いたって（以下削除済み）

〔記録…魔界21日目（2）〕

どうした私。まだびびってるのか。そろそろ覚悟決めろ。

〔記録…魔界21日目（3）〕

……くそ。こんなに自分が意気地無しだとは思ってなかったぜ。
こんなんで泣いてるとか、どこのお嬢様だ。

〔記録…魔界21日目（4）〕

（削除済み）

〔記録：魔界21日目（5）〕

（削除済み）

〔記録：魔界21日目（6）〕

今さっき移植を終えた。気合いを入れすぎて針を深く刺しすぎたせいか、左腕の移植位置周辺はかなり痛む。少しずつ熱も持ってきている感じだ。相当腫れるかもしれない。やだなあ。

で、一息ついたらもう真夜中だ。どれだけ怖じ気づいて、グズグズしてたか思い知らされて、逆に笑えてくる。ああ、あとであのへんのログも消しておかないとな。

さて、これで私は左腕から徐々にキノコに変わっていく。当面、その進行については記録を取らないといけない。さすがに一晚でマタンゴに変身ってことはないと思うが。

ナラクカケラの菌株が定着すれば痛みは麻痺するはずだ。寄生されたゾンビは腹を撃ち抜かれても悲鳴も上げず、普通に動いて喋ろうとしたらいいから、痛覚は切れると推測できる。移植に伴う拒絶反応もそうなってくれば嬉しいが、どうだろうな。こういう

時は大抵、都合よくはいかないもんだ。

しかし、地底のゾンビキノコに寄生された人間の手記なんて、なかなか貴重な記録になるだろう。どこかで売れるんじゃないか？ 戻ったら生還記録と合わせて出版なんても洒落てるかもしれない。

あとは、早々に頭まで菌が回って本物のゾンビにならないことを祈るだけだ。

『記録…魔界22日目』

すごい めまい のどが あつい、こえが

熱が すごい うげけない

めが まっしろ

きんしが めに はいったのか

なんども はいた

てが もう

27 魔界の人

〔記録：魔界22日目（2）〕

みずが のど かわく

たるまで うごけない

みず のめない

めまい

きもち わるい

こえが でない いきが

〔記録：魔界22日目（3）〕

くるしい たすけて

とうさま

〔記録：魔界23日目〕

あつい かゆい

〔記録：魔界23日目（2）〕
（判読不明）

〔記録：魔界23日目（3）〕
（判読不明）

『記録…魔界26日目』

生きてる。

生きてるぞ。

どうにかまだ、私は霧雨魔理沙のままでいられるようだ。

こうして文字も書けるし声も出せる。起き上がれるようになったし、歩いてものも持てる。体力が空っぽになって、穴蔵の中を一周したら途端にへたりこんで動けなくなつたが、それでもナラクカケラに寄生されて自我も意識も体の自由も残ってるつてのは、控えめに言つて上々の結果だろう。

……あとになつて誰かがこの日記を読んだとき、世にも醜悪な、文字ともつかない何かのたくつてるだけに見えたりしたらぞつとしない話だが、幸いなことにいまここには私しかない。だから私の正気は私が保証できれば十分だ。どうせ間違つてたら死ぬだけだからな。

熱でぶつ倒れてる間に何十回吐いたか知らないが、驚くことに腹も減らない。もしかしてもうとつくに消化器官とかも死んでるのかもしれない。吐くものが胃液からだんだ

ん得体の知れない黒と白の塊ばかりになってきたのは、前向きに無視だ。体の中まで白黒なんだったら、魔法使いのコーデイネイト的には間違つてはいないだろう。

移植を試みた左手にはわずかな痺れ。握力は落ちてゐるがとりあえず作業には支障なし。もっとパンパンに腫れるか、菌腫がびっしり生えてくると思つてたが、色が真つ黒になるくらいで案外きれいなもんだ。ついでに左目の視界がいくらか欠落しているが、これもおそらく菌株がここまで伸びているせいだろう。眠つてゐる間に上半身の神経の数分の一くらいは菌糸に置き換わつたかもしれない。

最初の3日は寢床から一歩も動けず極彩色の夢を見てゐただけのどうしようもないポンコツだったが、顔の腫れが引いてからは多少マシになった。熱が引くまで手足の震えも酷くてロクに動けずにいたが、そのぶん考える時間だけはたくさんあつた。ほとんどまともな思考になつちやいないが、キノコでトリップしてたようなもんだ。なかなか自分とは思えない発想が湧いてきたので、ちよいとイケてると言つていい。

さて、そのトリップ中のナイスアイディアについて検討しよう。

私がここから脱出するのに、なにか継るものがないか。

40度に発熱する頭で端から端まで考えてみて、ひとつ、希望があることに気付いた。正確には100個くらい考えた益体もないアイディアの中で、一番継るのがマシそうな、

太めの蜘蛛の糸つてところだ。

魔界は広い。とてつもなく広い。ヴィナの廃墟、墜ちたる神殿、神綺の治める水晶宮だ。けでも幻想郷の数百倍に及ぶし、文明のある地域にしたって、端から端まで数えたら、惑星間移動に匹敵する距離があるとも聞いた。

その広大な魔界のうち、これまでに私が見た地域は2つある。魅魔様に連れられてきた時の巨大な建造物に囲まれた文明の都と、もう一カ所。

白蓮が封印されていた法界だ。

そうだ。白蓮だ。あいつは千年間、魔界に封じられていた。宴会の与太話に小耳に挟んだ程度だが、たしか牢獄みたいな場所で、ロクに魔法も使えない、魔界の辺境中の辺境だったはずだ。

私が今いるここも、一ヶ月過ぎても誰も見かけない、まさに魔界の果てだ。

そう。突拍子もない発想だが、もしも。

もしかしたら、何もかも上手く都合よくいけば、こここの近くに白蓮のいた遺跡や痕跡があるんじゃないか。

ああ、わかつてる。こんなの、頭の中までキノコの毒に塗れた発想だ。そんなのは百も承知だ。

でも。ただの妄想だろうと、何も考えもせずに闇雲に脱出口を探すよりはずっと助かる可能性が増える。数兆分の一が数億分の一になるくらいかもしれないが、それでもやるべきことの指針があるだけ、ずつとずつとマシだ。

「記録・魔界28日目」

断続的に発熱。数時間おきに起き上がれないほどの倦怠感。

左手は少しずつ動きが鈍ってきている。まだ万事OKというわけじゃなさそうだ。経過観察を続ける。

昨日から占術の勉強を始めた。付け焼き刃にもほどがあるが、どうせ起き上がってられないから丁度良い。

私の好みは星占いだが、残念なことに魔界じゃ空の星は見えない。地道に他の系統を学ぶことにする。幸いこれも魅魔様に基礎は叩き込まれているので、なんとなくとっかかりは掴めそうだ。

撃つと動くが信条の私だが、今回ばかりはそいつはお預け。この人跡未踏の魔界にあつては動く前にできるだけ考える必要がある。少しでもいい、判断の根拠になる材料を

集めるんだ。

あてずっぽうの勘で動く前に、右と左、東と西どっちを向いて進むのがマシか、その手掛かりを掴む。そのための占いってわけだ。

生憎と私は霊夢と違って、運の悪い方だ。悪運なら自信はあるんだがな。

〔記録・魔界32日目〕

体調についてはかなり改善。左手の痺れも幾分弱まった。なかなかのベストコンディションと言えるだろう。

このところ、ずっと占術に没頭していた。おかげで大分上達できた。

しかし、食事のことで頭を悩ませずに済むつてのはこんなに快適なものなのか。今回の留学が終わっても、種族魔法使いになるのは当面見送るつもりだったが、アリスの言うことにも一理あるな。丸一日、研究に取り組んでも腹が減らないつてことは、実質的に一日が倍になったようなものだ。ずるいぞ。

ついでに副作用で睡眠も要らなくなってきたが、今のところ眠れるうちは眠っている。まあ、できるだけキノコ人間になるのは遅い方がありがたい。

そして、ひよつこ駆け出し占い師として、毎日ひたすらに自分自身の運命を占い続けた結果、たぶんこれはどうやっても間違いないやなさそうだと思えた結果がある。書き出してみよう。

この穴蔵から北西に約3500キロ。

そこに少なくとも、私の運命に影響を及ぼす何かがある。

そこ以外では一切何の反応もない運命値が、この地点でだけわずかに動く。何百回か試してみても、それだけはまず間違いないというところまで確信した。

つまり、ここに向かえば私の運命は動く。

運命値つてのは因果への干渉を示すパラメータだ。私が遮二無二に腕を振り回して、すこしでも世界が震えるかどうかを調べる値だ。この洞窟で干からびるまで300日を待つのも、明日首を吊るのも、思い切って魔界の果てを目指す旅に出るのも、世界の因果に対して見れば何の差もない。

だが、この地点に向かえばそれが少しばかり変わるようだ。

残念なことに、良い方が悪い方かはまるでわからないが、これが私の分水嶺だ。

ただ死ぬのを待つのは、多少マシな因果律のズレが生まれる。

封印されていた世界を滅ぼす魔神でも掘り当てるのか、聖輦船試作2号機を発見して幻想郷に凱旋できるのか、極めて幸運なことに地上に繋がる転送門が偶然埋まっているのかはわからない。

だけど、ここですら今の停滞を打破できる何かが起こるかもしれない。

ナラクカケラと共生してキノコ人間と化した今の私なら、控えめに見てもあと一年はこの洞窟で生き続けることができる（そのうち、霧雨魔理沙ではなくなり生きて動くキノコの塊になる事は許容するとして）。

それ以上のことを望むなら、ここを目指すしかない。

〔記録…魔界33日目〕

今日も占いを続ける。結果は変わらず。

左腕の痺れは続いている。良くなったり悪くなったりだ。と言って、状況的に改善に向かうとは思えないし、指にいくらか影響が始めたので、簡単な補助具を作ることにした。モノを握るくらいならこれで十分だろう。

これで一年は生き続けられるったって、これじゃあそのうちの半分はキノコの苗床で終わる感じだな。

〔記録…魔界34日目〕

仮に、と前置きをして旅の計画をはじめた。言わずもがな、運命の地への調査旅行だ。移動をするならその支度を調えないといけない。こういう時、異変解決の経験はとも役にな立つ。伊達に弾幕少女やってないぜ。

今回の目的地までは片道3500キロ。690万キロに比べれば家のまわりの散歩みたいな距離だが、それでも今の私には大変な長旅になる。

まず、移動手段の確認だ。箒の時速が60キロとして、12時間で720キロ。24時間ぶっ続けで飛べば1440キロ。

魔法使いとしてはあまりにも地道でみっともない現実じみた数字だ。魔法のステッキ一振りでピューンと目的地までひとつ飛びと行きたいが、あいにくその魔法は品切れだ。ウチにはないよ。

さて。一切の休みなしで飛べば、ほぼ2日、多少余裕をみても3日目の早々には目的地

に到達できる。

徹夜なら4日はしたことがあるが、今の体調でそれができるかは疑問だ。いや、キノコ人間に睡眠なんか不要だが、私が弱れば弱るほど、ナラクカケラは私を菌糸の塊に変えていくはずだ。何しろこいつにとっちゃ私が生きて動いて喋るのは繁殖の邪魔なだけだからな。隙あらば私を弱らせて、支配権を乗っ取りたいと思っているはずだ。

もどかしいが、ちゃんと休息を挟んで移動するほかはない。

夜に星のない砂漠をまつすぐ飛ぶ自信はまつたくないの（まず間違いなく輪形彷徨まつしぐらだろう）、昼の間だけ移動することにする。

連続で箒の上で過ごした最長記録は、たしか永夜異変の時の19時間。あれを毎日やれといわれると、それだけで吐きそうだが——まあ、泣きごととは言ってられないな。どうせ吐いても出てくるのは菌糸の塊だ。

で、1日12時間移動して、あとはキャンプを張って休む。食事の準備はいらないが、あの魔界の太陽に焼かれ続けていたくはないので、テントを立てて体を休めるようにする。荷物はその分増えるが、計画的に動くにはそれしかない。

1日に720キロということは、片道4日半、つまり5日。往復でなら10日だ。現地に何があるかまではわからないので、調査と探索に2日。余裕をみてあと2日か3日は

欲しい。つまり二週間の準備が要る。

まず水が40リットル。これは絶対に減らせない。魔法のバッグは現在貯水槽になっているので、荷造りのためにこれを持ち出すわけにはいかない。幸い、キノコ人間になった私に食料は不要になっているが、ナラクカケラは一日に2リットルの水を吸い上げて生存する。それとは別に、私も水を飲まないといけない。

野営道具と最低限の探索装備。首尾よく何かを見つけたなら、向こうで解説が必要になるかもしれない。辞書と参考書替わりに魔道書もあるだろう。背負って歩くのは無謀なので、箒に積み込むためのキャリッジを作るしかない。これだけの大荷物は魔法店を出した時以来だ。一度作ったら試しにテスト飛行も必要だな。

さて、やるが増えてきたぞ。

霧雨魔法店、ひさびさの新商品ラインナップ更新と行こう。なにしろ顧客が一番望んでいるものは私が一番よく知ってる。こんなに簡単な商品開発もない。

【記録：魔界39日目】

準備に3日ほど費やして、どうにか満足のいくものが用意できた。クローゼットの中

身は残らずテントの幌とキャリッジの背負い籠に化けたが、三重に縫い返したせいで強度は十分。私が5人中に入っても問題なく運べる。

箒の整備も順調。途中で動かなくなったりしたらまず助からない。言わば私の生命線だ。今の私なら徒歩でも時間さえかければ歩けるだろうが、この大荷物を抱えてじゃ無理があるし、水が切れれば身ひとつで進むのも限界がある。

洞窟の設備については悩んだが、可能な限り遺すことにした。

これはあくまで調査旅行、探索行だ。ここから3500キロの近所に、ちょっとした小旅行をするだけだ。

何かの危険に出くわしたり、問題が起きたりして移動が難しいとわかったら、すぐここまでする。この洞窟はそのための拠点であり、ここに帰ってくればまたしばらくは生き延びることができる安全なマイホームだ。いまはそう考える。帰ってくる場所があるとなんとでは、生きてやろうって気持ちには変わるはずだ。実体験は語る。

現実的に考えるにしても、せっかく数百日単位で生き延びることができるベースキャンプを放り出していくメリットは薄いわけだ。

準備の一環で、自慢の髪をばつさりとやって、細く編んでロープを作った。

幸い、切った端から菌糸を伸ばして粘つくことはなかった。乙女の命はいまのところ

キノコに侵されてはない。一安心だな。

与太話は抜きにしても、魔法使いの髪は魔力を流すための高精度の魔法素材だ。魔法使いが大体髪を伸ばしてるのはこれが理由だ。

魔法を使うにはある程度の長さが必要だが、幸いにして当面、弾幕はパワーのポリシ―の順番はない。いまはマスタースパークの出力よりも、荷物を縛り上げるロープのほうが優先だ。

私が生きていれば髪は伸びるので、そのうちまた追加で資材を作り出すことができる。私自身が貴重な素材供給源ってわけだ。これは他の事にも言えるので、例えば今は定期的に血を抜いている。これも貴重な生体資材だ。両手両足の爪もバカにできない。なお、左手の爪については念のためより分けて管理してある。こいつはそのうち勝手に動き出すか芽でも生えてきそうだと思って観察日記をつけてるところだ。

なににせよ、生体由来の資材があるだけで使える魔法はぐっと増える。あいにくこの魔界の隅っこじゃ、私の他に生きているのはキノコだけ。いうことで私自身が貴重なして唯一の望みの綱だ。できるだけ長い間、人間でいなくちゃならない。

ほかにもまだまだやることはまだあるが、それは今すぐにやらなくたっていい。まずはこの調査を成功させて、続きはここに帰ってきてからだ。

だから、ちゃんと戻ってこないとな。

【告知】霧雨魔法店魔界支店、次の週末から二週間ほど休業いたします。

【記録…魔界40日目】

今日は箒の性能テストをした。箒で1時間ほど東に向けて飛んで、そのまま帰ってきた。それだけだ。魔界の空でも箒は問題なく私を空に浮かべて、いつも通り飛ぶことができた。たぶん弾幕だつて十分こなせる。こっちの残弾は心許ないけどな。

東に向かつてみた理由は大したものじゃない。今回の目的地は北西にあるから、なんとなくそっちじゃない方を見に行つてみただけだ。まあ、何か面白いものが見つかるようなことはなかった。どこまで行つても荒野だけ。

私はもう、昨日今日魔界に来たばかりのお上りさんじゃない。この赤茶けた不毛の大地と代わり映えのない水色の空を一ヶ月も、それこそ飽き飽きするくらい延々と眺め続けてきた。

でも、今日までこの拠点、洞窟が見えないところまで飛んでみたことはなかった。

岩山一つ見えないくらいでなんだつて思ふかもしれないが、全然違つた。飛び始めて

30分くらいだろうか。そこでいきなり、わけもなく思い知らされたんだ。

前も後も右も左も、何一つ代わり映えしない魔界の荒野で。私はたったひとりぼっちなんだつてことを。一番近い端まで690万キロ、あるいはもつともつと広い荒野のなかに、私だけが取り残されている。

誰も私を見ていないし、見つけてはくれない。もしここで私が墜落して骨でも折ったら、それでもうおしまいだ。

そう思ったら、震えが止まらなくなった。すぐに引き返したくなるのを必死に押し殺して、自分に言い聞かせて、どうにか1時間の目的地まで向かってから、すぐに全力で逃げ帰ってきた。

半分泣きそうになつて——いや、怖くて涙が止まらなかった。

地平の向こうに洞窟が見えても、よく似た別の山じゃないかとか、方角を間違えてるんじゃないかとか、悪い想像ばかりが頭をよぎった。

どうにか戻ってきてからも、すぐには動けなかったくらいだ。

これじゃあまずい。本当なら今日は箒の慣らし運転で、明日にでも出発するつもりだったが、もう少し時間を取って魔界の空に慣れないといけない。多分今のままじゃ、パニックを起こして遭難する。

幸い、荷物の準備は終わっている。近くで一泊、キャンプとしゃれ込んでみるのも悪くないか。鼻水垂らして戻ってくる羽目になるかもしれないが、どうせ誰も見ちゃいない。情けないなんて言ってられないしな。・

〔記録・魔界45日目〕

正確にはまだ真夜中。ついさつき45日目になったばかりだが、準備万端の筈のすぐ側でこれを書いてる。

とりあえず練習はみっちりこなした。連日のキャンプで、とりあえず筈の上で悲鳴を上げるのは抑えられるようになったはずだ。あとはもう、一発勝負だな。これ以上先に引き延ばしたって良いことはない。当たって砕けろだ。

今日、夜明けとともに出発する。

どうか、この旅に幸運があらんことを。

第3章

〔記録・魔界45日目 探索行1日目〕

持ち出したメモが小さいので、記録は最小限にとどめる。自動書記は荷物になるので留守番だ。

本拠地を出て北西に移動、6時間。目算で360キロ。

方位磁針以外では方角がわからず、拠点の洞窟の岩山が消えるとあとはただ、360度が赤茶けた荒野だ。まっすぐ飛べていると信じて進む。

相変わらず生物の気配はなし。私を知る限りじゃ、魔界にだっていろいろ魔物は住んでるはずなんだが、どこにも見当たらない。どうやら本当にここら一帯には人っ子一人、猫の子一匹いないらしい。

今さら奇跡の出会いを期待してたわけじゃないが、こうやつてはつきり思い知らされると、こたえるな。

〔記録…魔界46日目 探索行2日目〕

夢見は最悪。寒すぎてロクに眠れなかった。装備の防寒には難アリだな。

昨日は砂丘の隙間にテントを張ったわけが、吹きっ晒しになるだけでこんなに寒いなんて思ってた。まあ、それ以外はテントには問題なし。思ったよりも風に煽られたが、吹き飛ばされる恐れもない。これは予行演習で確認済みだったので想定内だ。

それにしても今から寒さ対策って訳にもいかない。移動時間を少し夜にずらして、まだ日の当たるうちに休んだ方がマシか。

それと、せめて岩陰か何かを探した方がいいかもしれない。

〔記録…魔界47日目 探索行3日目〕

今日、途中でふと思いついて、岩を並べて砂漠にケルンを作った。遮るモノの一切無い魔界の荒野では、2時間くらい進んでも振り向けばちゃんと見つけることができる、とりあえず目印にはなる。双眼鏡を使えば半日進んでも使えるだろう。

自分の居る場所から振り返って、常にケルンが一つに重なるように進めば、直進していることになるはずだ。

最悪、帰り道に迷わないだろう。

しかし、こういうのはもっと早く思いついているべきなんじゃないか。

〔記録：魔界48日目 探索行4日目〕

目が覚めるとすぐに猛烈な砂嵐。テントが半分埋もれかけていた。視界が完全に砂で遮られ、方角もわからない。出発しようにもどつちが向かう先かもわからないので、砂の隙間に伏せて晴れるのを待つ。

結局、一日そのままそうしていた。

〔記録：魔界49日目 探索行5日目〕

丸一日、砂嵐止まず。昨日に引き続きテントの中で過ごす。睡眠不足が原因か、環境の変化のせいかな。左手の麻痺が進む。右目にも視界に不良アリ。手持ちの装備では処置が行

えないので、対症療法で済ませる。

「記録…魔界49日目 探索行5日目（2）」

退屈すぎてやることがない。占いもいい加減飽きてきた。

今日も魔界には私一人。生きてるものは何も見かけない。

やっぱりここまで来ると異常だ。

私知ってる魔界の生き物と言ったら、いるとしないの境目を彷徨う シュレディンガー・キャット 匣 猫

や、沼地に潜み擬態をする沼模人 スワンプマン。存在の定義を揺るがす白黒縞鴉 ペンベル・レイブン、などなど。

どれもこれも生き物って言うよりも概念に近く、ヘンテコ極まりない魔物たちだ。魔界の濃密な魔素なしでは存在できない、言うなれば生きた魔法みたいなものだ。

そんな連中が一匹も見当たらないってことは、ここら一帯は魔界にもかかわらず、魔素がまるつきり存在しないって事になる。

ってことは……どうにも嫌な予感がするな。当たって欲しくない予想なんだが、悪い材料ばかり集まってくる。

「記録・魔界50日目 探索行6日目」

今日も停滞。テントが砂で潰れかけた。2時間に一度砂を払う作業を繰り返す他には何もできない。

水の減りが想定よりも早い。今からでも引き返すべきか。

昨日の夜、誰かの歌声を聞いた気がする。たぶん夢か幻聴だが、そうだとわかっていても落ち着かない。

「記録・魔界51日目 探索行7日目」

砂嵐の弱まったスキをみて、強引に出発した。視界不良は続いている。砂のせいか、実際に目がいかれてきているのか判別不能。だが、もう予定の半分が過ぎてるのに、まだ目的地までたどり着けていない。もうとつくに余裕は尽きてる。けど、逃げ帰ってもどうしようもないならこのまま行くしかない。

ここまで来たんなら、戻るよりは進むほうがいい。

そのはずだ。

「記録…魔界52日目 探索行8日目」

砂嵐続く。速度が十分にでていない。タンクに破損あり。水が漏れていた。

およそ二日分のロス。くそつたれ。

午後から砂嵐が激化。夜よりも暗くなった。嵐のど真ん中飲み込まれて、ほとんど布の下に潜り込むようにテントの中に避難する。嵐が弱まる心配がない。

私は魔界のサイズを考え違いしていた。洞窟での一ヶ月半で、魔界では滅多に天候が崩れないものだと思い込んでいた。そうじゃない。魔界では、何もかもスケールが桁違いにでかい。晴れが数十日続けば、嵐も数十日続く。そういう壮大なスケールの世界なんだ。この嵐も、端から端まで何万キロもある巨大な雲の下で起きてることになる。

最悪の想像をすれば、これまで5日続いた嵐は、これから数十日にわたって続く嵐の本体のほんの端っこで、私はその端っこでじたばたもがいて死にかけてるだけかもしれない。

もしこの予想が当たっていたら、もう私には為す術がない。どっちにしろ進もうが、最低5日間は嵐の中から抜け出せない。だからって、じっとしてるのが正解とも限ら

ない。このまま嵐が強まれば、空に吹っ飛ばされるか、地面の下に埋もれて終わりだ。でも、今から出発なんてそれこそ自殺行為だ。くそ。どうすりゃいいんだ。どうするのが一番いいんだ。わからない。誰か、誰でもいい、教えてくれ！

〔記録・魔界53日目 探索行9日目〕

嵐が弱まった夜半過ぎ、強引に荷物をまとめて出発した。方角を頼りに全速力で飛ぶ。幸い、風はそこまで強くなく、どうにか二回ほど墜落する程度で済んだ。荷物は半分くらいダメになったが、水だけは気合いで死守した。

それにしても先が見えない。移動日数を考えれば今日中には目的地に着いている計画だったが、丸一日飛び続けて、日暮れまでなにも見当たらず。休憩の時にはずっと占術を繰り返しているが、結果は不明瞭。

明日はもう10日目だ。残りの猶予は5日、予備に持ってきた水も使い果たしつつある。これ以上先に進むのは厳しい。

せめて明日中に引き返すことを考えないと、もう余裕がない。ここまできてギブアップとか勘弁してくれよ。この先に目的地があるはずなんだ。

行くべき道はこっちで合つてゐるはずなのに！

〔記録…魔界54日目 探索行10日目〕
大発見だ。

聞いてくれ、マジの大発見だ。記録用紙がどうこう言つてゐる場合じゃない。誰かに聞いてもらえないと興奮して死にそうだ。

今日の朝、突如魔界が晴れて、行く先に思いもよらないものを発見した。昨日の夜、自棄になりかけたところでキレイなかつた自分の諦めの悪さと悪運を褒めてやりたい。

見つけたぞ。砂に埋もれかけた遺跡。目的地に着いたんだ！

遺跡と言つても小さな小屋のようなものだが——ああいや、今はそんなことはどうだっていい。私はやった。やったぞ。

やつてやったんだ！　ざまあみろ！

一ヶ月半ぶりに、私のものじゃない文明の痕跡に巡り会つただけでもだいぶ感動したわけだが、そんな感激ものはこいつの前では全部吹っ飛んだ。

この干からびた小屋の隅、張り付いて動かない木片を発見した。

見つけた瞬間に声を上げそうになった。

いや、嘘だ。そこら中を走り回って、もうめちゃくちやに叫び続けた。こんなに爽快な気分は、魔界に来て初めてだった。

このボロボロの古くさい木片が何を意味するのか、理解して欲しい。ああ、私の悪運も大したものだ。

こいつは飛倉の欠片だ。白蓮を助け出す時に使われた、聖輦船を飛ばした破片だ！

残された魔力はズいぶん弱っていて（魔界に来るときにはほとんど力を使い果たしたと聞いている）、ふわふわ宙を漂うのが精一杯だが。そんなことはどうでもいい。

こいつは聖輦船の一部だ。つまり、幻想郷にこれと同じものがある。

これがあれば、幻想郷と連絡が取れるかもしれないんだ！　ワオ！

……こほん。よし、ストップ。

まずは落ち着け。深呼吸。落ち着くんだ。

順を追って確認しよう。興奮して考え違いをしてるって可能性もあるからな。ぬか喜びして落ち込むとあとがきつい。

まずおさらいだ。類感魔術っていう魔法の基礎がある。一つのが二つに分かれた

た時、そのふたつは魔法的な繋がりを持つて理屈だ。これに基づいて、片方を魔法的な理論で操作すれば、その影響は分かれたもう一方にも及ぼされる。これは時間や空間を超越して、影響を与えられるのだ。

丑の刻参りの藁人形に、髪の毛を埋める理由がこれだ。

つまり。この飛倉の魔法を解析して、その動作をある程度支配できれば。

類感を通じて、幻想郷にある飛倉本体——命蓮寺の連中に何かを伝えることができる。私が飛倉を震わせたり、動かせたり出来れば。極端なことを言えば、聖輦船も同じように動き回る。たとえば何分おきかに、断続的に震わせるとかして、メッセージを送ることが可能はずだ。ああ、モールス信号ってのはどう打つんだっけ？

そうだ、大発見だ。

幻想郷と意思疎通ができれば、助かる確率はぐっと増える。

私はアリスやパチュリーたちを、魔法使いの先達として信頼している。不可能なことを前に独りで秘密を抱え込み、自分の失敗を隠そうなんて愚かな事はしないはずだ。

私がヘマをやらかして起こした大失態を、ただ笑いものにして、あとは口笛吹いて誤魔化すようなことはしない、はずだ。

……それくらいにはあいつらを信じておきたい。

だとすれば、飛倉への干渉が不十分だったとしても、白蓮が私のメッセージに気付くかどうかは、そう分の悪い賭けじゃない。

とりあえず今は、何とか生きて洞窟まで戻ることを考えなきゃならない。

と言つても方法は一つしかない。あとはもう昼夜ぶつ通しで飛ぶだけだ。本抛地に戻るだけだ。なあと、三日徹夜すれば済む。今の私はキノコ人間だ。それくらいできる。できないはずがない。

道標のケルンは砂に埋もれて、どっちに戻ればいいのかもわからないが、やってやる。やるしかない。

第4章

〔記録…魔界59日目〕

生きてる。どうにか生きてベースキャンプまで帰り付いた。

ああ、なんてこった。あんなにもくそつたれだと思つてたのに、この洞窟を見た瞬間、私はそりやもう盛大に、わあああ泣いてしまった。

もうここは愛すべき我が家なのだ。

ただいま懐かしのベースキャンプ。霧雨魔法店魔界支店。

私はやったぞ。大冒険を経てみごとに成果を持ち帰ってきたんだ！

今日は久しぶりに新鮮な水を飲んで、たっぷり眠ってやる。朝寝坊だつていい。萎れかけのナラクカケラにもたっぷり水をやらないといけない。こいつと私とは運命共同体なんだ。しっかり生き延びてくれよ。

……さて、幸せな報告の次は悪い報告もしなけりやいけない。

左手の感覚が消えた。もう肩から下が完全に動かない。反射や不随意運動は起こるが、左腕は完璧にナラクカケラに支配されつつある。探索行で無茶をした分、死にかけた体に菌糸が支配を広げたってことだろう。

痛覚はまだ辛うじて残ってるが、触覚はほぼなくなった。火で炙ってみても……まあ似たようなものだろう。香ばしい匂いくらいはするかもしれない。

なんとなく気になって指先を切ってみたが、血に混じって菌糸の根が糸を引いていた。いよいよ私は本格的にキノコ人間まっしぐらのようだ。いまのところ、私の4分の1か3分の1くらいはナラクカケラの菌床つてところだろうか。

まだ左目は辛うじて視力を保っているが、視界の半分は真っ白なカビに覆われているし、残りもぼんやり輪郭が見えれば良い方だ。色覚が残っているのは多少なりともありがたい。

が、この調子じゃそのうち頭のなかにまで影響が出てくるだろう。出来るだけ右脳でモノを考えるようにしないと。この日記にやたらキノコ界の将来を案じる記述が増えてきたら注意してくれ。未来の私よ。

不幸にばかり目を向けていても楽しくないので、前向きな話をしよう。

飛倉の（正確にはその破片の）解析を始めた。魔法の様式はかなり古いが、ちょうど具

合よくアリスから頂戴した魔道書に近いものが載っていた覚えがある。さすが私、先見の明だ。

白蓮を探すために命蓮寺の連中が集めていたということは、あいつらの魔法様式にのっとった仕組みだろう。白蓮は魔界の魔法を学んでいたのだから、その大本を辿れば、アリスにも詳しい術式になっている可能性が高い。今回も記憶頼りだが、やってみる価値はある。

うんざりする現実はいいかわらずだが、何かできることがあるだけで、それに取り組める、こんな素晴らしいことはないな。

そう思ってなきややつてられないぞ、こんなの。

「記録…魔界63日目」

まったく素晴らしい。やっぱりは天才に違いない。

ついに飛倉の魔法の解析に成功、思い通りに動かせるようになった。

わずか4日でこれとは、いよいよ私の天才ぶりも極まってきただろうか。あるいは、程よく私の頭の中に根を張ったナラクカケラが知恵を貸してくれているのか。キノコとの

二人三脚ここに極まれりだな。

私の華麗な魔法さばきを説明しよう。断片的に書き写してあつた魔道書の構文を、片端から適当に書き写しては起動するか確かめて、ダメだったら別のページに移って同じ事の繰り返し。これを実に1300回。ひたすらの試行錯誤の末に、よもやびつたり合致する術式が見つかるとは思わなかった。

ぶっちゃけ今回もどうして動いてるのかさっぱりわからない。なのでもうロクに手出しもできない。ワオ。こんなんばかり増えてくなく魔界支店は。

宙に浮かべて固定した木片に、右に三回、一秒休んで左に三回、また一秒休んで右に三回——その繰り返し動作を指示する。

1時間、この信号を継続して送り、次の1時間は何も動かさず放置。そしてまた1時間動かし続ける。自然にはまず起きない動きだ。

類感魔術は距離も時間も超越した魔法だ。そうでなきや丑の刻参りでびつたりわら人形に五寸釘をぶつ刺した時、同時に相手が死ぬはずない。

これで幻想郷に残っている飛倉に、何らかの異変が生じる。生じるはずだ。

白蓮たちがこの異常に気付けば、何かの方法でコンタクトを取ってくるはずだ。

できれば派手に動いてくれよ。いつそ命蓮寺がまるまる回転してくれた方がいいんだ。

むしろそれくらい派手に暴れてくれ。墓石が全部なぎ倒されて、法話に集まった檀家が全員吹っ飛ばされたつて構うもんか。幻想郷に戻ったら、ちゃんと生きて戻れたら、あとでいくらでも賠償してやる。

こっちはそれくらい必死なんだ。

「記録…魔界63日目（2）」

最高だ。信じられない。ああ、人生最良の日だ！（あとで考えたがこれは嘘だ。霧雨魔理沙の人生の記念日にするならもうちよつとマシな日が他にもいくらでもある。訂正しよう）

なんと、信号送信からわずか4時間で応答があつた。こちらが用意した命令とは明らかに違う動きで木片が反応したのだ。右に一回、左に二回、右に一回。右に二回、左に一回……

間違いない。意味のある文章だ。言葉だ。ここに誰かがいることを理解して、メッセージが送られてきた。幻想郷からだ！

どうやら、幻想郷でも私がいなくなったのはそれだけの一大事らしい。人気者は辛い

ね。勝手に葬式が挙げられて、あとは月命日ごとに故人を偲ぶ会で酒盛りが楽しまれていたわけじゃ無かったってことだ。

ああ、これでやつと。やつとだ。

ようやく。私は一人じゃなくなった。……ひとりじゃ、

(削除済み)

ちよつとあまりにみつともないくらいに泣き喚いたので、恥ずかしいから消去する。感動の会話はもうちよつとあとにとつておこう。

とりあえず何はともあれ、アリス達に現状を伝えて、解決策を練ってもらう。

大丈夫だ。あつちには私よりも優秀な魔法使いに、私の何百倍も魔界に詳しい連中が揃ってる。きつとベストの解決策を見つけ出して、たちどころに私を救出するプランを練ってくれることだろう。

まあ、今の今まで完全に忘れてて、これから一から考えるってことでも、寛大に許してやろう。今日の私は最高に気分がいいからな。

本片による通話のやりとりを飛倉通信と命名した。そのうちもつと効率のいい情報の

やりとりを考えなきゃいけないが、今はまず少しでも情報が欲しい。

双方向の連絡にはひとまずモルルス信号を使う。白蓮たちは知らないかもしれないが、たぶん河童ならわかるだろう。頼りにしてるぜ、にとり。

〔記録・魔界64日目〕

幻想郷とのホットラインが完成して8時間。ひっきりなしに信号を送り合って、お互いの状況確認に費やした。今やこの古びた木片は私と幻想郷の対策本部を結ぶ生命線だ。一度にやりとりできる情報量はあまりに少ないので、送った状況は全体のごく一部だが、私の居場所と現状は無事向こうには伝わったようだ。

そしていいニュースと悪いニュースが一つずつ。

いいニュース。今日も幻想郷の様子が知れた。

……忘れるな。私は何千億分の一つで幸運を引き当てて、絶対不可能だと思っていた地上と通信し、アリスやパチュリーと会話ができている。

これがどれだけあり得ないほどの幸運なのか、骨身に刻み込め。ああそうだ。絶対に勘違いするな。私はいま、何億分の一かの奇跡の上に生かされている。それを忘れるな。

そして悪いニュース。

私がいる地点は、魔界の辺境の中でもとびつきりに最悪な場所だということらしい。なんとなく予想はついていたが、一番悪い形の中の形だ。みたいだ。

およそ、幅80万キロで伸びる魔力の「風いだ」地帯。その風のベルトのほぼど真ん中に私のいる洞窟が位置している。この一帯ではどんな達人でも、それこそ御伽話^{フェアリーテイル}級、絵^{ピクチャーブック}・クラスの本級の大魔法使いだろうと、素人同然に成り下がるという。なるほど、だから白蓮はここに封印されてたわけだ。

つまり、私の現在値は外部からの魔法干渉が不可能な地点だ。

正確に私のいる座標がアリス達に伝えられたとしても、そこで紫が隙間を開いてハア伊とお出迎え、みたいな簡単なエンディングにはならなそうだ。

これはそもそも期待してなかった。私が行方不明になった段階で、おそらくスキマ妖怪には誰かがコンタクトを試みたはずだ。それくらいには心配されていただろうと想像しておくことにする。

今に至るまで私が助かっていないということは、紫にはこれが不可能か、私のためにそこまでの無茶はできないということになる。

アリス経由で魔界からも探索隊が出ているらしいが、予想通り私の遭難地点は魔界の

文明中心地から数百万キロと離れた地点。およそ人跡未踏の地域であるという。

この魔界を創りたもうた造物主たる神綺にも、魔界の全ては掌握できていない——というか、元々あいつは自分の創り出した命全てが自分の思い通りにならないことを楽しむような神だ。

当然、誰か個人を救ったり助け上げたりはしない。自分の意のままになるような命をそもそも求めていないのだ。造物主があとから都合を利かせてどうにかなるような世界を作るのは好みじゃないのかもしれない。どこぞのイドラデウスとは一味違うな。

さて、話を戻そう。私の救出を困難にしている原因は背景放射。魔素の枯渇だ。

優れた魔法使いほど、自分の内側の魔力には頼らない。世界に満ちる魔法の流れを吸い上げ、それを操作することで巨大な魔法を使う。そもそも、大魔法をぜんぶ自前の魔力で賄えるような魔法使いはほとんどいない。

この虚無の砂漠にはそもそも、その魔素がほぼ存在しない。多様な生態系を持つ魔界にあって、この砂漠にほとんど生き物がいないのはそれが理由だ。生きた魔法が存在できないくらいに、魔素の薄い——ゼロに近い地域。

こんな場所で私が生き残ってこれたのは、私が魔法使いではなく人間だったからだ。全身から魔法をありったけ搾り取られても、人間は死なない。生きていくのに支障が

なかったからこそ、どうにか生き延びる目を探るだけの余裕が与えられた。……仮にここに放り出されたのがアリスやパチュリーだったとしたら、即刻干からびて動けなくなっていただろう。私は、私が自分で思っていた以上に、奇跡的な幸運の上に生かされてたってわけだ。

だが、いまやそれも終わりつつある。ナラクカケラに寄生された私は、半分くらいは種族魔法使いに近い生き物になりつつある。外部の魔素を吸い上げて育成する地獄の菌株は、あまりにも欠乏した魔素を求めて私の体の中に向かって根を伸ばしている最中だ。

菌糸の侵食がやけに早い理由もこれだ。寄生先を痛めつけてでも同化を進めないといけないほどに、ナラクカケラも苦しんでるってわけだ。

手足の麻痺も、視界の欠損もこれらが原因。たぶん内蔵もかなりやられてる。私は自分から命を縮めたことになるが、もしナラクカケラの寄生を思いつかなかつたら、おそらく私は飛倉の欠片の探索行にも出ることができないまま、アリスたちと連絡が取れることもなく、一人で餓えて死んでいる。

私は、人間だったことで幸運にも生き延びて、人間を止めようとしたことで幸運にも生き延びたことになる。

つまり、良い判断をしたってことだ。

「記録…魔界68日目」

本日も晴天なり。幻想郷との通信は順調。

では今日は悪いニュースからだ。

思っていた以上にナラクカケラの侵食が早い。多分、探索旅行で無茶をしたのが響いてるんだろう。いよいよ自分が自分でなくなる瀬戸際ってのが見えてきた。左腕に続いて左脚も麻痺が広がり、自立ができなくなってきた。壁沿いに杖をついて歩き回っているが、体の半分が砂袋になった気分だ。

ついでに言うとも顔の左半分も上手く動かない。

最近は何朝鏡を見るのも怖くなってきた。まあ、腫れてるわ浮腫んでるわでお世辞にも褒められないくらい酷い顔なんだが、それ以前に、映ってるのがどうにも「私」じゃないんだよな。あんまりこの話はしたくない。やめやめ。

なににせよ、体が自由にならないってことは、脱出のための作業を進めるなんて段階じゃない。あと何日余裕があるのかわからないが、ふと眠くなったらそのまま目が覚めず霧雨魔理沙はキノコの塊になってジ・エンドってことも十分に考えられる。

対策は急務だ。

そしてこの困難を解決する方法が、幻想郷の霧雨魔理沙救出対策本部からいくつか提案されつつある。順にそれを紹介していこう。

まずパチュリーから、このままわたしは捨食の法を行って食を断つことが提案された。種族魔法使いになればそもそもナラクカケラの共生関係は不要になるし、自前で魔力を身体に流せるようになれば、欠損した肉体の再生もできる。

かなり魅力的な提案だ。魔界に来る前なら本気で嫌がってただろうと思うが、今さら好みで四の五の言ってる場合じゃない。

だがこれには問題がある。まず、私一人で捨食を済ませるには、いまこの場にはあまりにも技術も準備も不足してるってことだ。一通り儀式の手順は聞いたが、何もかも揃った幻想郷の私の工房に籠もって、3年くらい準備して、それでどうにか成功確率七割ってところだ。今すぐにここで実行するとなると、目の前にランプの魔神が登場して3つ願いを叶えてくれるのを期待した方がまだマシだな。

ついでに、この魔法の枯渇地帯で種族魔法使いなんかになった瞬間、私は蒸発して死ぬ。食を捨てるだけの段階ならある程度は対応は可能らしいが、そんな話を聞いてまで喜んで試したくはない。

次。アリスからはパチュリーの提案をフォローする形で新しいアイディアがあった。

私一人じゃ実行が無理なら、魔法の行使を遠隔でサポートするって案だ。幻想郷との飛倉通信を利用して、食を捨てる種族更新のための魔法様式を転送する。儀式魔法陣を暗号プロトコル化して圧縮転送、こちら側で受信して復号し描画デバイスによって再現するって発想だ。

格好つけて言ってるが、要は通信越しに私が言われた通り黙って魔法陣を描くわけだ。

【問題点】通信速度の関係で、魔法陣の内容すべてを送り終わるにはどう控えめに見ても6週間はかかる。

しかもこれは私が不眠不休で術式の全てを一字一句間違えず完璧に写し終えた場合の話だ。現状、描画デバイスの性能がポンコツである以上お話にならない。

たぶん、そこまでに私がキノコお化けになる確率の方が幾分高い。希望的観測を十分に含めて、成功率は3%くらいだろうか。

問題はまだある。捨食の法はあくまでも人間が魔法使いになるための儀式だ。あまりにナラクカケラの寄生が進めば、わたしはそもそも術式において人間とみなされない可

能性が出てくる。

もちろん術式は補正するが、現状、自分がどこまで人間なのか、私自身にも正確には把握できていない。キノコ人間が魔法使いになるには、どんな魔法が必要なのか。残念なことに私には喋るキノコの知り合いはいない。こんなことならもう少し魔法の森で探しておけば良かったな。

そして、これらの課題を全てクリアして魔法使いになったところで、ここで魔法が使えないという根本的な問題はまったく解決しない。

いやはや、先は長そうだ。

【記録…魔界69日目】

今日は成美から差し入れがあった。いまは食べる必要はないんだが、生命力を増幅させるこの魔法は実に重宝する。こんな簡単な構文で増幅できるってのはいいだろうという仕組みなんだろうな。できれば2ヶ月前に知りたかったぜ。

本日も晴天なり。幻想郷との通信も感度良好。使い魔の術式を送ってもらって暗号変換ができるようになったので、速度はモールス信号の5倍にアップ。しかもなんとタイ

ムラグ0秒だ。光速より速い。速いつてのいいことだ。

幻想郷との通信は可能になったが、いくらタイムラグがなくても受信機がボンコツじやどうしようもない。いくら向こうに幻想郷屈指の大魔法使いが控えていても、こちらが情報を受け取るのに時間がかかりすぎる。

そして、魔法の多くは呪文と魔力の他に、構成要素や触媒を必要とするのだ。それらは獣脂であつたり花粉であつたり、草花の朝露であつたり、地面の石英であつたりする。中には賢者の石なんていう反則級のバケモノも存在するが、あれは例外中の例外だ（そもそもパチュリーの賢者の石は作成者以外には使えない代物で、本物のアルスⅡマギカとは別物らしい）。

私の魔法に必要なものは、幻想郷なら鼻歌交じりに片手間で集めることができるものばかりだ。だから普段はそんなもののことを意識することもない。ストックは十分にあり、いざとなればそこらですぐ補充できる。

だが、ここは人跡未踏の魔界の果てだ。砂と石だけのこの世界ではいくら探しても材料がない。私が所持しているのは、最初に持ち込んだ所持品一式と、あとは私の身体由来の生体素材だけだ。

この制約があまりに厳しい。ただでさえ物足りない魔法が、さらに大きく限られてし

まっている。ミニ八卦炉が役に立たないのも大体それが理由だ。

少しでも足しにならないかと意を決して（ちよつと思ひあまつたと言つてもいい）尻の肉を剥いで煮詰めてみたが、採れた脂はほんのわずか。

そりやそうだ、こつちに來てからキノコとビスケットしか口にしていけない。もともと貧相だった体は肋の本数が数えられる始末だ。ダイエツトなんて向こう5年は必要ないくらいに、脂肪なんてどこにも残つてない。まして私はいまや半分キノコ人間。脂なんてそうそう見つからないだろう。この試みは座るのがちよつとしんどくなつた挙句、ただの徒勞に終わった。

触媒は物理的な構成要素だ。魔法門を開いて転送するにしたつて、それ自体に準備に莫大な時間がかかる。本末転倒だ。

というかそれが可能だったら、強引にでも私を引っ張り込んでもらうほうがずっと手取り早い。途中で門が閉じて腕の一本や二本ちよん切れても、交通費としちや安いものだろう。

解決すべき問題は多く、ヒントは見当たらず、せつかくの幻想郷との通話も愚痴と文句で溢れそうになる。なにかも今は夢物語だ。

だから、やるべきことをやるしかない。ああ、わかつてる。わかつてるさ。

「記録…魔界71日目」

本日も晴天なり。通信良好。

朝一番でアリスから連絡があった。魔界の首都、水晶宮から救援船が打ち上げられる計画だという。安全性をすべて無視して、必要になる物資だけを積み込んでミサイルみたいに撃ち出す予定らしい。

発射までは約3週間。それからさらに1ヶ月かけて魔界を縦断し、ベースキャンプの周辺に着弾する行程だそうだ。なお、着弾誤差は最小でもプラスマイナス800キロ。最大では1万キロくらい南に反れるかもしれないとか何とか。まったく素晴らしいニュースだ。嬉しくて泣けてくるな。

いやまあ、冗談めいて流してるが、これは本当に喜ばしいニュース。ただ、いまの時点であまりに期待をかけすぎるとあとで痛い目を見る。そのへんは十分思い知ったので、ちよつと割り引いておくほうがいい。

仮に物資満載のロケットが無事到着したとしても、そこがどこかを突き止めて、再度探索行を試みる必要がある。その時に私の体が旅に耐えられるか。……いや、そこでは大

丈夫だったとして、物資を全部運びこんで、一から魔法を組み立てるのにどこまで時間を要するか。それまでに手足が動かなくなったらどうしようもない。

あとは時間との勝負ってやつだが、今んところ敗色濃厚だな。

さて。その目下の懸案事項であるキノコ人間化の進行阻止については、対策本部から画期的な解決策が示された。正確には、定期連絡でアリスと話してるうちに自分で思いついた。

私の身体はナラクカケラに侵食されて、言わばキノコの塊になりつつある。実質的には私の左半身はキノコに接ぎ木されているような状態なわけだ。遠からず私は命を残らず搾り取られて、半身不随のままキノコの苗床になる。

今の身体状況の不調は、有り体に言ってこいつが原因だ。けど、食料もない現状、手足から菌糸を引っ抜いてさあ元氣健康ってわけにはいかない。このキノコがなかったら私はすぐに餓えて死ぬ。そこで逆転の発想だ。私がいま欲しいのは自由に動く手足なのだから、ナラクカケラの侵食を止めなくたっていいわけだ。他の方法で手足が動くようになれば、それで十分って事になる。たとえば、外側から手足の神経系を操作する。そうすれば、当分の間身体の自由は保てる。

そう。魔力系で私の脊髄をバイパスし、動かない左半身を人形操作の要領で動かして

やるのだ。幸い、人形の扱いは地底探査の時に経験がある。うまくやれそうだ。

こいつはナイスアイディアだと思って提案してみたところ、アリスからは激しい調子でやめろというメッセージが届いた。脳が焼き切れるとか、フィードバックで精神汚染が起きる心配がとか、そんなややこしい警告がずらずら並んでいた。

が、どうせもう私の体は半分死にかけてるんだ。やってみる価値はある。

魔力糸の心当たりはある。私の髪だ。魔法使いにとつて、髪の毛は魔力を流すのには最適な素材だ。強度も申し分なし。もともと私の身体に属するものなんだから、拒絶反応も少ないだろう。

やれやれ、明日からショートヘアか。鏡はどこにしまったつけ。

キノコに寄生された身体を、さらに私が支配し直してやるわけだ。そう考えるとちよつと愉快的気分になれる。これでさらに人間の体からは大きく規範を外れてしまうが、すくなくと身動きできないもキノコの苗床になるのはずいぶん先になる。

もちろんこれで寄生が止まるわけじゃないし、侵食も進行するから、そのうち私は動くキノコの塊になることは避けられないが、それにしたって、追加で数十日の身体の原因が得られるわけだ。このアドバンテージは大きい。

今すぐにでも、やるべきだ。

『記録・魔界74日目』

私は人間の魔法使いだった。ここに来てからしばらくして、私はナラクカケラと同居するキノコ人間になった。そして今、半分人形が操作する半人形・四分の一キノコ人間へとクラスチェンジをとげた。

……いよいよもって自分が人間の言葉を喋ってるのか、文字が読めてるのか不安になってくる。アリスやパチュリーと交信できているんだから問題はないと思いたいが、それにしたって飛倉通信越しだ。私の身体が出力してるのが、もとの私とは似ても似つかないノイズと胞子の塊になっている可能性は捨てきれない。

さて。懸案だった手足の不調はこれで解消。一時的に身体の機能を取り戻して、両手で作業が可能になった。実質的には左半身は人形越しなので、動作の遅延がありもどかしいことこの上ないが、ひとまず手は動く。

アリスにはもうあらん限りの語彙で罵声を浴びせられたが、この判断は間違っていないと信じている。

と言うかあいつ、沸点超えるとあんなに素が出るんだな。知らなかった。

ともかく、1分かけてちようちよ結びひとつを作る程度だが、左腕が動くようになつたことは喜ばしい。これを最大のチャンスとして、できる限り作業を進めなければいけない。

今は時間が惜しい。文句はあとでいくらでも聞いてやるから、まずはとことん付き合ってもらうぜ、パチュリー、アリス。

第5章

〔記録：魔界79日目〕

久々の日記になる。このところ、ずっと作業に没頭していた。

幸いにして今の私は食事も睡眠も要らない半自律キノコ人間だ。普段の4倍で作業ができる。時間はまだまだたっぷりある。時間くらは。

この一週間、ずっと通信にへばりついて、侃々諤々、幻想郷の対策本部と怒鳴り合いながら、魔法陣の構成に取り組んでいた。目指すは機能と用途を絞り込んで限定した、転送用魔法陣。……正確には転送魔法の受信部分だ。

前に話したように、現状で私自身を幻想郷に転移させるのは、おそらくどんな魔法使いにだって不可能だ。魔力の枯渇した死の砂漠には、それだけの魔法を行使するだけの生体素材が絞り出せない。

だけど。幻想郷の側から何かを送り込むってことなら、少し話が違ってくる。

魔界と幻想郷の直通転送魔法陣を完成させるのは無理でも、途中にいくつか、中継点を噛ませ、転送対象を特定の要素に限定、それも極めて限定的な機能だけに絞り込んでやれば、ぎりぎり私の作業量でも実用可能レベルに持ち込める。

そう。脱出計画。この魔界の果てから帰るための方法が、いよいよ実行に移された。これ以上考えててもしょうがないから見切り発車で始まったと言う。

脱出についての要点を整理しよう。現在の私の位置が、魔法的なエアポケットのど真ん中で、どんな手を尽くしても魔法による干渉が不可能である以上、どうにかして私自身を移動させるだけの、魔界から私をここから脱出させるだけの推力が必要になる。そして残念ながら、私の筈でははるかに力及ばない。

そこで、救出対策本部のパチュリーは、信じられない力業でその解決法をひねり出してみせた。

それはズバリ、ICBM。

霧雨魔法店の裏に転がっていた、自称天才科学者・岡崎夢美教授謹製の、きゅーきゅー鳴く大陸間弾道ミサイルを引っ張り出して、これをどうにかして、魔界まで転送して寄越そうというプランである。

そう。パチュリーのやつは私を大陸間弾道ミサイルに括り付けて、魔界の端まで打ち

出そうというのだ。

どうなってんだ。あいつら全眞脳細胞営業停止してんのか？

これを聞かされた私の身にもなつてほしい。マジで自分の頭がおかしくなつたかと絶望しかけたぞ。弾幕はブレインだの、魔法使いはスマートにだの言つてる連中のやり方じゃないだろ、これ。パワーとかゴリ押しつてレベルじゃねえ。

……ひとまず文句は置いとく。確かに物質の転送は、生物に比べればかなり簡単になる。さらに自分の所有物に関して行ふならその労力も難易度も劇的に低下する。靈質的リンクの認識が——まあ、専門用語は置いとこう。そこらの石よりも、使い慣れた羽根ペンのほうがはるかに簡単に転移させることができるつてことだ。

ちょうど、私がこの魔界に放り出された時と同じ理屈だ。魔界にいる霧雨魔理沙の元に、私が所有するものを放り込むなら、難易度も労力もはるかに低くなる。あのICBMが私の所有物である事実をたてにして、パチュリーはそれを力業で転送魔法の構成式にねじ込んでみせるつもりだ。

岡崎研究室の技術の粋、魔法と科学の融合、時空間可能性遡航船がつくりだした未来の夢の技術でかつ飛ぶICBM。このミサイルは、燃料を使わずに空を飛び、移動し、かく音速を超えてみせる。

大陸間弾道弾の最高時速は2万4000キロ。17年かかるはずだった旅路は4000倍に短縮され、12日になる。私はマッハ20ですつ飛ぶ舐先に括り付けられていればいいって寸法だ。正確に目的地を目指さなくなったといい。現状よりもずっと救出の可能性が高まる地点に着弾すれば、それだけ私が助かる確率は上がる。

うん。正直言つて正気の沙汰じゃないな。倫理観が営業停止でも受けてんのか？

素直に飾らないことを言おう。あいつらは、あの人でなしの魔法使い連中どもは、私が死体になって——もつと言えば肉片の切れっ端になって、ミサイルの先端にこびりついて幻想郷にたどり着けば、それはきわめて上々の結果だと考えてる。うん。すっかり忘れてたが、あいつら人間じゃないんだ。つくづく肉体に縛られない魔法使いの主張しそうなことだ。

たぶん、そのあとでゾンビにするなり人形で再現するなりゴーレムに意識を移すなりすれば。それは魔法使いとして十分に生存の範疇ってことだ。さすが頭の中まで魔法になった連中の言うことは違う。

あらためて心からの感想を正直に言おう、バカじゃないのか。

そして実に素晴らしいことに、今のところこのアホみたいになぶざけた方法が、一番まともに私が助かる方法だってことだ。言っとくけど褒めてないからな。

それにしても、ICBMとかよくあんなものこと覚えてたな。私ですらすっかり存在を忘れてたやつだったのに。

そう思っただけ聞いてみたら、言い出したのは霊夢らしい。

……まったく。心配するそぶりすら見せないのかと思えばこれだ。参ったな。

〔記録…魔界80日目〕

本日も青天なり。通信良好。良好ったら良好。

あの狂気の沙汰としか言いようのないプラン——霧雨魔理沙ミサイル発射計画は、恐るべきことに順調に進行している。なんと信じられないことに白蓮からお墨付きが出た。というかあいつに聞けばだいたいレベルを上げて物理で殴る以外の回答出てこないのわかってるだろ。なんも参考にならない。

最近は成美からの差し入れだけが心の癒やしだ。愛してるぜ成子。

よくよく考えると、私の知り合いにはろくな魔法使いがいない。魅魔様、そろそろ帰ってきてもらいたいんですが、そんであいつら全員一発ずつぶん殴って欲しいんですが、今どこで何をしてますか？

恐ろしいことに、転送用魔法陣は私の努力によって少しずつ完成に近づいている。こいつはつまり自分で自分を打ち上げるミサイルの発射台を作らされているようなもので、新手の拷問なんかじゃないか。これ。

まあ、とりあえず先のことには目を瞑るとしてだ。これで何もかも解決ってわけじゃない。ミサイルの軌道や着弾（爆発はしないで欲しい、頼むから）に関するコントロールの問題がある。

私の現在地からみて、魔界文明圏は南西の方角に位置する。砂漠に突き出した半島のような形状をしているので、下手に軌道制御を誤ると、そのまま通り過ぎて今よりも魔界の奥地にすっ飛んでしまう可能性がある。

そうなればあとは事態は悪化の一途。1500万キロの荒野で朽ち果てるだけだ。

音速の数十倍ですっ飛ぶミサイルに括り付けられた私は、その時おそらく意識を（たぶん人間の形も）保っていないだろうから、指示や命令を出すのは無理だ。といって、遠隔制御が可能なレベルでもない。

移動のためのシステムや制御については事前にプログラムしておく必要がある。

これを買って出たのは我らが盟友にとりであるわけだが、天才岡崎教授がしつちやかめつちやかに組み立てた夢のハイパーアイテムであるICBMをどこまで解析して動か

せるのかは、あいつの腕次第って事になる。……頼んだぞにとり。正直お前だけが頼りだ。私の命綱だ。

つくづく、何なんだこの計画。魔法使いつてのは頭のネジの飛んでる連中ばかりだ。でも、そのバカにすぎるしか、もう私が生きて帰る手段はない。

人間の魔法使い霧雨魔理沙が、霧雨魔理沙であることを保つ方法はない。

白状しよう。この魔界の片隅にひとりぼっちで朽ちて死ぬだけなら、人間であることにこだわらんかなかっただろう。でも、……万が一にでも。いや、数千兆分の一の確率が、あいつらのおかげで数万分の一にまでなつたって聞かされたら、命が惜しくなつたつてしょうがないじゃないか。

笑いたきや笑え。私は怖いんだ。自分が自分でなくなるのが。

そのためだつたら、どんな方法だつてあがいてみせる。

私は帰るんだ。生きて、幻想郷に。

「記録…魔界81日目」

このところ毎日ずっと魔法陣を書いては消し描いては消しの繰り返し。この日記を付

けてないと曰付もまともにわからなくなってきた。

本来なら触媒とかで済ませられる術者と召喚対象の霊質リンクの同一性も、全部術式でまかなわれないとならない。オジギソウの根っこ一束磨り潰せば済むのと同じ仕組みを再現するために、丸3日も魔法陣を書き続けている。

幻想郷に戻ったら看板でも描いて一儲けしてやろうか。

成美からは相変わらず差し入れが届く。今日はコーンポタージュ味の術式だった。構文にしてわずか150行。

あいつの魔法はどこからどうなってるのかさっぱりわからないが、ちゃんと腹が膨れるのが不思議だ。魔法を上手い具合に生命力に変換しているらしいが、その効率が非常にレベルでパチュリーもアリスも首を捻っているらしい。

残念ながら舌と目がろくに利かないので、その味もちゃんとわからないわけだが。戻ったら存分に堪能してやるから勘弁してもらおう。

手足の動きがまた悪くなってきたので、魔力系を増設する。この対症療法でいつまで持つかは怪しいが、これしか方法がないのも確かだ。安全性最優先でひたすらに確認テストを繰り返しているせいで作業効率是最悪。進捗はナメクジより遅く、これがまた苛立ちの原因でもある。半分以上見えない目で式を間違えたらそれまでだから仕方のない

話だけだな。

私が本当にただのポンコツになる前に、この魔法陣が書き上がるか。当面はそれが勝負になる。分の悪い賭けだぜ。

〔記録・魔界82日目〕

今日はちよつとした魔法のレクチャーをしようと思う。

このところ私が取り組んでる転送魔法の術式の仕組みについて。魔法を囓ったことのない諸君にもわかるように魔理沙さんの特別講義といきたい。さつきから単純作業の繰り返しで吐きそうなほど退屈で退屈で仕方ないので、酔狂にも今こいつを読んでいるやつにも付き合ってもらう。拒否権はナシだ。いいな、わかったか。

さて。転送魔法についてはご存じのことと思う。遠く離れた場所から現在位置まで、物質を移動させる魔法だ。勘違いされがちだが、よくある瞬間移動の類とはちよつと違う。

一般的には、瞬間移動は自分自身が目的地に移動する魔法だ。これはほとんどの場合、移動距離と運べるものの大きさ、重さが魔法使い自身の魔力と技量に依存する。細かい理屈は省略するが、単純にいつてしまえば自分自身を魔法に変えて、目的地に再構成す

る仕組みだ。その理論上、パチュリーでもせいぜい数キロの移動が限界だろう。これは董子に聞いた話だが、あいつの超能力も似たようなもので、遠距離を「跳ぶ」のはかなり難しいらしい。せいぜい目に見える範囲、弾幕を緊急回避する程度が無難なところだという。

転送魔法は少し理屈が違って、こつちと向こうを繋げる門を作るものだ。言ってみれば魔法の直通通路を形成して、その移動距離をゼロにする魔法だ。早苗のやつは「どこでもドアですね!」とかよくわかんことを言ってたな。

転送魔法では目的地と現在値にそれぞれ出入口を作ってやる必要が出てくる。紫のやつはこれを瞬間的に、好き放題にやれるらしいが（スキマ妖怪ってのはつくづく化物だな）、魔法でこれをやるには、あらかじめ目的地に魔法門を用意しておくか、もしくは事前に私と魔法的なリンクを繋げた構成要素を配置する必要がある。

魔法使いが何もなしところから杖や魔道書を取り出すのを見たことがあるなら、まさにそれだ。自分の所有物を手元に呼び寄せるのが、最も基礎的な転送魔法になる。

そしてこの時、目的地と現在値を繋げるのに必要なのが、認証体——つまり鍵と鍵穴だ。これは実のところそんなに難しいものじゃなく、魔法使い自身の体がその代わりになる。出口を作った私と入り口を作った私が同一人物なら、魔法的同一性の担保は十分

ってことだ。途中のややこしい認証作業は全部省略して、入り口と出口は勝手に繋がってくれる。

これを踏まえた上で、現在の課題について述べよう。

いま、パチュリーたちがしようとしているのは、幻想郷の霧雨魔法店跡地に残っていたICBMを、どうにかして私の手元に転送することだ。あの大陸間弾道ミサイルが私の所有だったのは既知の事実なので、それ自体は大した問題じゃない。

肝心なのは、幻想郷側で魔法を使うのが私じゃなく、パチュリーたちであるってことだ。私がこの洞窟で書いた魔法陣と、私のいない幻想郷で、パチュリーたちが書いた魔法陣が、同じ霧雨魔理沙の手によるものだと認証され、寸分変わらず狂いもなく一致しなけりやならないってことだ。

パチュリーたちは私という鍵の形がまったくわからない状態で、それと寸分の狂いもなくぴったりに合致する鍵穴を作らなきゃならない。これは言うほど簡単なことじゃない。可能な限りミスを減らすために、転送魔法陣の構成式には徹底的な削減が行われた。

まず、今回は繰り返し使用する必要はないので使い捨てで構わない。つまり強度については気にしなくてもいい。どうせこれが失敗したら、2回目の転送魔法を実行する前に私は死ぬ。

次。転送魔法は本来双方向性のあるものだが、今回は行き来する必要もないので、片道切符で構わない。こっちから向こうに送り返す機能は要らないので、ざっくりこれで作業量が半分になる。

さらに、送り込むものは確定しているので、それに専用の術式を組むことができる。汎用性・冗長性を持たせる必要が無いので、そのぶん構成式の確実性を増すことができる。

送り込む対象が（厳密には）マジックアイテムじゃないから、そこに関する防護も不要。魔法の品はそれ単体で魔法の力を発揮しているので、術式が阻害されないように防護やプロテクトをかける必要があるが、今回はそれも要らない。

もともと、精密機器だから転送時に壊れないように、慎重に移動させる必要がある。井戸の中に投げ込むみたいに荒っぽくはいかないってことだ。このあたりを含めて、もとの構文は8分の1くらいに短縮されたが、それでも作業量は莫大だ。

受信する私の側は、単に霧雨魔理沙が書いたって事実さえあればそれで十分だが、パチュリーたちはありとあらゆる方法で、「これは霧雨魔理沙が書きました」「霧雨魔理沙が使ってる魔法です」って偽造を完璧にこなさなきゃならない。

挙句、今の私は半分キノコ人間、もう半分は操り人形と、元々の霧雨魔理沙との同一性がかかなり怪しいと来ている。そこまで含めて調整が必要なわけだから、考えただけでぞ

つとするな。

やれるだけのことはやって、限界ギリギリまで削った魔法陣の構成文は、およそ十二億四千万行。まともに書き上げるのには数ヶ月、下手したら半年から一年はかかる。パチユリーはそれを一週間で終わらせると宣言した。

正直、今日ほどあいつらを化け物だと思ったことはない。

「記録…魔界84日目」

本日も晴天——ああくそ。

もう嫌だ。もう飽きた。もう限界だ！

いつまでこんなことやらなきゃならないんだ！ やめるぞ！ もうやめてやる！

サンリンナキドリソウの種と同質の成分を持つ赤色に比する霊質を媒介した魔法式の効果を同等に担保するための主要な魔法式その38。今日の午後はこれを書き上げるのに4時間をかけた。このあとその39と40をやつつけることになる。少なくともこの3倍はかかるだろう。

正直このログを取ってる時間をもったいない気もするが、愚痴のひとつも言わずにい

たらそれこそ死ぬ気がするのでやめる気はない。

何日も前から指が震えて上手く動かないし、地面に這いずるように顔を近づけないと文字も読めない。何度書き間違えてやり直したかもわからない。

今すぐ全部ぶん投げて不貞寝したい気分だが、それを阻むように成美から定期報告が届く。最近、すっかり幻想郷との通話相手はあいつだ。

他の面々は、話す余裕もないくらいに作業に忙殺されてるらしい。そうだろうな。あいつらのやろうとしてる魔法の厄介さは私の比じゃない。

そんなのはわかってるんだ。くそ。

けど、……ああ、もう！

やるぞ、やるんだ。余計なことは考えるな。やるしかない。

〔記録…魔界85日目〕

全然終わらん。くそ。お喋りしてる余裕もなくなってきたぞ。

このままだとマジでやばい。

終わらないぞ、これ。

〔記録…魔界86日目〕

吐きそうだ。気持ち悪い。

目が乾いて死にそうだ。ちゃんと線が引けてんのか、これ。くそ、無駄口叩いてる暇ない。手え動かせ。

〔記録…魔界87日目〕

今日は一日、転送魔法陣の結合テストをして過ごした。問題なく動いている……はずだ。明日の午前から転送が始まる。万事上手くいけば、それで私をここから救い出すロケットが（あえてミサイルとは飛ばないようにする）到着するわけだ。

転送が始まったら、飛倉通信はそいつにかかりつきりになる。限られた帯域を他の通話やお喋りに使ってる余裕はない。幻想郷との定時連絡も一時中断って事になる。だから、そこから先は私一人で対処しなきゃならない。

これまで、魔界に放り込まれて二ヶ月近く、ずっとやってきたことのはずだなんだが、

いざそう考えてみると心細くて死にそうになる。

「記録：魔界88日目」

転送魔法陣展開。術式稼働開始。
頼む、上手くいってくれ。

第6章

[記録：魔界88日目(2)]

転送開始から1時間経過。通信は良好。

ひとまず現時点において、魔法陣の稼働状況に異状なし。

[記録：魔界88日目(3)]

転送開始から4時間が経過。冒頭の認証コードがようやく終わり、本題のICBMの転送が始まった。

飛倉通信の帯域があまりに貧弱なため、一度に情報を流し込むほどの情報許容量がない。だからICBMの転送は魔力に変換して一括で送り込むのではなく、端から随時コード化して転送するシステムが採用された。私を乗せるロケットは、端から少しずつ輪

切りにされて、スライスされた一枚一枚が順次こちらに送り込まれてくる。こいつをそっくり最後まで積み上げれば、無事完了というわけだ。

朝から4時間、じつと目の前の魔法陣とにらめっこしているが、いまのところ進捗状況は全体の3%。このままのペースでざっと計算すると全てが転送し終わるまでには5日と13時間かかることになる。亀のような進捗だが、贅沢は言えない。何もかも上手くいけば、あと1週間後にはここをおさらばできるんだ。

これまで3ヶ月も耐えた。あと一週間くらい、なんてことないはずだ。それぐらいなら、体もまだ保つてくれるはずだ。

「記録…魔界89日目」

ほとんど眠れないまま朝になった。

進捗は19%。だいたい5分の1くらいこっちに顔を出したミサイルは、間抜けな顔をしていまにもきゅーきゅー鳴き出しそうだ。転送中の体感時間は止まっていることになるので、こいつに意識はないはずだが。

……というか、今さらだが鳴くミサイルって何なんだろうな。夢美のやつ、いったい何

考えてあんなもん作ったんだ？

〔記録：魔界90日目〕

進捗36%。どうも予定より遅れてる気がする。大丈夫か？

〔記録：魔界91日目〕

進捗42%。明らかにおかしい。昨晚あたりから進行が遅くなり始めている。本当なら今日の朝には折り返しが見えてこないとならないはずなんだが、まだ半分にも達していない。焦ったつてしょうがないとわかってても、気がかりでろくになにも手に着かない。

他にもやることは山積みで、出発の準備だつてしなきゃならないのに。

〔記録：魔界92日目〕

進捗49%。くそ。なんなんだ。昨日の夕方くらいからほとんど転送が進まなくなった

ぞ？ 何かあったのか？ 夜中からずっとマニュアルと作業記録を見返してるが、皆目わからない。

通信の帯域は全部これに割いてちまってるから、アリスたちと連絡も取れない。なんとか無理をしてでも、もう一回線を用意すべきだったか。

……違う、そんなこと後悔したってなんになる。

上手くないかないなら、どうにかしなきゃならない。くそ。何が原因だ。私がか手順を間違ったのか？ これから予定してた構文を3回、頭から最後まで読み通してみたがやっぱり異常はみつからない。となると、私には自分で気づけないポカをやらした可能性がある。なんてこった。どれだけ自分がポンコツでも問題ないように、あんなにテストを繰り返したってのに。くそ、ふざけんな！

「記録：魔界92日目（2）」

ダメだ。完全にやらかした。おかしい。

輪切りのミサイルと間抜け顔とにらめっこをして一日を過ごした。

半日かけて進捗は2%も進んでいない。これじゃ転送完了まで1週間どころの騒ぎじ

やない。半分のミサイルは代わり映えのしない状態で宙に浮かんだままだ。くそ。いつたい、何がどうなってるんだ。何がいけなかったんだ。教えてくれ。誰でもいい、教えてくれよ！

【記録：魔界93日目】

進捗56%。痼癪を起こしてミサイルを掴んで引っこ抜きたくなる衝動に歯を食いしばって耐える。すぐそこに、目の前に魔界脱出のための手段があるのに。何もせず指くわえて見てろって、こんなのありかよ。

くそ。違う。そうじゃないだろ。

落ち着け。考えろ。それしかできないんだから考えろ。

遅延が起きている理由について推測できること。

私にも、パチュリーたちにもミスがなかったと仮定する。今は確認のしようがない上に、転送を止められない以上はそう考えるしかない。

幻想郷から魔界に——中継点を挟んだ転送経路のどこかに、魔力嵐のようなものが発生して、類感魔術を妨害している可能性を思いついた。

飛倉通信は直接、幻想郷との情報の伝達をしているわけじゃないが、何かのノイズを拾ってしまふ可能性は否定できない。たとえば、偶然にもこの木片とそっくりな形をした、類感魔術が思わず間違えて同一性を見出してしまいそうな何かの破片が、魔界のどこかで動いたとすればどうだ。

……そうだ。命蓮寺の連中が全部回収したと思っていた飛倉の破片が、こうしてまだ魔界に残ってたんだ。だったら他にもまだ取りこぼしがあることは否定できないんじゃないか？ たとえば、これ以外に飛倉の破片が、どこかに引つかかっていたとして。類感魔術の規則に従えば、それも同じ魔法の対象になる。そいつが何かの加減で動き回っていたりしたら、その動作を飛倉通信が拾い上げる可能性はゼロじゃない。

本来ならまず拾わないようなノイズだが（丑の刻参りで無関係の別人が死ぬような確率だ）、遙か彼方の幻想郷との通信に備えて、魔術の感度は限界まで引き上げられている。その分、混線も起きやすくなってるってことだ。

もちろん、通信にはそうしたノイズを除去する仕組みも用意されているが、何度も繰り返したように飛倉が一度に拾える情報は限られている。通信に2割のノイズが紛れ込めば、通信速度は8割に低下する。そのもつと大規模なものが起きているのが現状というわけだ。

ありえる、ありえそうな話だ。

解決方法は——ない。ただ黙って待つしかない。下手に手を出して通信が途切れたらそれまでだ。

こんなのはもう何日も前から予想できてることだが、こうして言葉にして確認でもないとなんか気が狂いそう。左手はまた動かなくなってきた。視界ももう、右側の半分ほどが怪しい。さらに魔力糸を追加したが、魔法で動かさないともう起き上がるのも難しくなってきた。

今すぐなんて贅沢は言わない。

頼むぜ。なんとか、私が私でいられるうちに。

「記録：魔界96日目」

進捗87%。87だ。ほぼ9割だぞ！

長かった。くそ長かった！ じつと、じつと耐えて、目の前の輪切りのミサイルを睨んで、睨み続けて、気が狂いそうになるのをじつと耐え続けて、3日過ぎた。

とりあえず終わりが見えてきたってことだ。60%を過ぎたあたりから急に速度が上

がりはじめて、何度も夢かと思った。大丈夫、いくらほった抓っても痛くないが、それは私の顔が半分キノコに乗っ取られてるからで、これは夢じゃない。断じて幻覚でもないぞ。

大丈夫だ。転送魔法はちゃんと発動してる。ここはきちんと幻想郷と繋がってる。あと2日か3日かわからないが、ひたすらに待てば、ミサイルは届く。

最近はお動くのも億劫で、ずっと寝たまま過ごしている。特に眠気もないんだが、何かができる気分でもない。いよいよ精神までキノコに侵されつつあるのだろうか。この日記、本当に読めるようになってるのかも気になる。

このまま侵食が進めば、そろそろ子実体を形成する時期だ。そのうちそこら中に胞子でもまき散らしたくなるんだろうかな。

いやはや、乙女として耐えがたい話だ。

「記録…魔界97日目」

くそつたれ。ありえるかこんなの。

なんだよ、なんだよそれ！　ここまで期待もたせといて、そんなのアリか！

ああ、ああ、もうダメだ。
もう何もかもおしまいだ！

ふざけんな！

第7章

〔記録：魔界97日目（2）〕

OK、だいぶ落ち着いた。いや、まだ最悪の気分だが、さすがに暴れ疲れた。泣き叫んで喚く以外のことがなんとかできるようになった。

状況は何も変わっていない。最悪だ。

一言で言えば、転送途中で通信が途切れた。いま私の前には、9割方でちぎれたICB
Mが転がっている。転送は失敗した。挙句、幻想郷との通信も完全に失われた。

くそ。最悪の最悪だ。一番やつちやいけないことだろうに。

いったい何が起きた？ さっぱりわからない。魔法に異常は無かったはずだ。

こんなにも希望を持たせといてこの仕打ち、ありえるかよ。

ああくそ。ちがう。そうじゃないだろ。……落ち着け。

泣き喚くだけならいつでもできる。死にたいんだつたらものの5分で実行できるんだ。

まだ私はここにいます。他にまだ、やれることがある。あるはずだろ。考えろ。できることはないか。それをやめたら、もう私は魔法使いじゃない。

【記録…魔界98日目】

半日かけて状況を洗い直した。

ズタボロの記録を探って転送状況を確認したところ、進捗状況は90.4%のところまで停止していた。通信途絶の原因は依然不明。

だが、いくらか想像はできる。おそらく、私の魔法には問題が無かった。無かったってことにする。問題が起きたのは幻想郷側の方だ。

類感魔術は、魔法的な繋がりのある2つのものの片方を操作することで、もう片方にも影響を及ぼす仕組みだ。つまり、こちらから幻想郷に干渉できるように、幻想郷からはこちらに干渉できる。こちらの飛倉の破片が壊れたんじゃない、幻想郷で飛倉自体に何かが起きたんだ。それこそ、壊れるなり燃えるなりの大きな損害が。

私が魔界に放り込まれて、約100日が経過している（数え間違いが無ければ）。とい

うことは、幻想郷はいま夏の終わりだ。台風野分か何かが入り込んで、大嵐でも起きた可能性がある。……あるいは、どこかの大馬鹿が派手にドンパチやらかして、命蓮寺まるごと吹き飛んだとか。

いや、理由なんてこの際どうでもいい。ひよつとしたら混線の原因になった飛倉2号問題かもしれないが、それもどっちだっていい。肝心なのは、通信先の飛倉が壊れた結果、それと魔術で繋がっていたこの木片もぶっ壊れたってことだ。

ああそうだ、類感魔術ってのはそういうものだ。相手を呪い殺すために、藁人形に五寸釘を叩き付けるものだ。釘を打つ前に相手が崖から落ちたら、藁人形のほうが破裂して潰れる。そういう性質の魔法だってことは、百も承知だったはずだろう。どうしてそれに思い至らなかった。信じられない間抜けめ！

幻想郷との通話も、転送魔法も、ぜんぶ飛倉を介して行っていたんだ。それがどんなに危うい状況の上に成り立っていたのかも気づかずに、この絶望的な状況の中、私は魔界の果ての果てで、パチュリーたちと話ができるのが当然だって思い込んでた。なんて間抜けだ。私はいつたい、どんだけアホなら気が済むんだ。

ああ、そうだ。

私はまた、690万キロの荒野でひとりぼっちに逆戻りってことだ。くそつたれ。

ちくしょう。……ああ。くそ。最悪だ！

〔記録…魔界98日目〕

本日も晴天なり。通信復旧の目処立たず。

……ひとつ悪くないニュースがある。最低最悪の状況からすればずいぶんマシなことがわかった。

ICBMは、完全に機能を失ってはいない。

てつきり私は転送がミサイルの端から順番に行われていると思い込んでいたが、それは間違いだった。輪切りにされたミサイルが中途半端に残されてるわけじゃなかった。万が一のために、空を飛ぶ機能が優先して転送されるように仕組んだんだろう。ミサイルの機能自体はあらかた転送が済んでいる。

こういう小賢しい工夫は、アリスあたりが氣を利かせてくれたに違いない。サンキューアリス。愛してるぜ。

整理しよう。私の前には、十全に機能を保った大陸間弾道ミサイルがある。このミサイルは空を飛ぶことができる。

問題なのは、機能を優先したせいで燃料が後回しにされてるってことだ。自己診断を走らせたところ、燃料が4割程度しか入っていない。

このICBMの航続距離は、最大有効で1300万キロ数える。計算上、今ある燃料だけで580万キロは飛ぶことができる。

……最寄りの魔界文明圏までは、最短で690万キロ。

つまり、あと110万キロ。月と地上を2往復するくらい足りない。
絶望的だ。

「記録…魔界100日目」

本日は記念すべき魔界滞在日数100日目。ついに私の漂流生活も3桁の大台突破ってわけだ。いやあ、ちっとも嬉しくない。祝うケーキもロウソクもない。あつたってやるわけないけどな。

が、そのかわりにプレゼントをひとつ用意した。この馬鹿げた状況をひっくり返す可能性の話だ。夢みたいに馬鹿げた話だが、100日記念に夢みたいな話をしてやる。

どうだ、まいったか。

余計なことは抜きだ。とにかく今、私の手元には時速2万4000キロで飛ぶミサイルがある。それは事実だ。

そして、約600万キロの——いや、希望的ごまかしはナシだ。最大限に見積もって580万キロを、このミサイルに乗って移動することができる。

これをあと110万キロ分、伸ばす方法の話をしよう。

このICBMは、バカ正直に燃料を燃やして飛ぶような代物じゃない。夢美のやつが作ったんだから当然だが、魔法と科学のインチキいいところ取りみたいな仕様になっている。そりゃそうだ。そうでもなきや12日も飛び続けられるわけがない。

確かロケット燃料つてのは、何十トンって単位を数秒で燃やしきって推力を出す、ほとんど指向性の爆発物みたいな代物だ。月に行くのだって、ずっと炎を吐き出しながら飛んでいくわけじゃない。出発のときに燃料の半分以上を一気に使い切ってありったけ加速してから、あとは到着まではほとんどなにもせず、せいぜい角度の微調整くらいをちよいちよいとやりながら、最後に逆噴射して速度を落とし、着陸するわけだ。

私は考え違いをしていた。このミサイルは、ミサイルの形をした簞だと思えばいい。簞を飛ばすのに必要なものは燃料じゃない。魔法の触媒と私の魔力だ。そうだ。昔こいつに

跨がって飛んでたのは、私自身だ。

科学じゃない。魔法なんだったら、私にもまだできることがある。

ミサイルを飛ばすのに必要な燃料を、魔法的な触媒にして叩き込んでやるのだ。そうして足りない航続距離を補う。そういう計画だ。これはたぶん、魔界で私が挑む最後のミッションになるはずだ。頼れる幻想郷からの支援は無し。私は一人きりで、これを完遂しなくちゃならない。

『記録…魔界100日目（2）』

ロケットの燃料。その構成要素。

この人跡未踏の荒野で、それを都合良く手に入れる方法を思いついた。

お忘れだろうか。私が持ち込んだ菌株のコレクション——魔界15日目くらいからほったらかしにしている中に、お誂え向きにシャグマアマミガサタケが揃っているのだ。こいつは毒抜きをしなけりやロクに食えない魔法使いの必須キノコだが、この毒の正体は何かと言えばギロメトリンだ。

こいつは加水分解してモノメチルヒドラジンを生成する。

ヒドラジン。つまり、ロケットの燃料だ。

魔界に放り込まれて3ヶ月。特に言及してなかったが、私が持ち込んだ菌床は可能な限り全部、この洞窟の中で栽培を試みている。幸運なことにシャグマアミガサタケは腐生菌だ。寄生する植物の根や動物がいなくても、栄養だけで育つ。

……この栄養が何かと言えば、この3ヶ月、ここで暮らした私が出したもの全でだ。

ああ、いまさう乙女の恥じらいとか言つてられるか。キノコたちは私が100日間、絞り出したものですすく育ちまくっている。

こちららキノコ人間として乗っ取られかけてる最中だ。ちよいと燃料を返してもらつたつて文句は言わせない。

邪魔なものを全部片付けて、洞窟を隅から隅までシャグマアミガサタケの栽培に使う。何も難しいことはない。私はキノコについては専門だ。なんだつて知つてゐる。

いまから育成を切り替えたとして、菌床から子実体を形成するのは早くて20日。丹精込めて世話してやれば、なんとか2週間強くらいに縮められるだろう。別に私はキノコ農家になりたいわけじゃない。全部の収穫を待つ必要もない、育つたやつから収穫してしまえば済む話だ。

菌床はビンに9つ。残りの養分を全部これにまわす。他のキノコは正直もうどうでも

いい。全部引っこ抜いて肥料にしてやる。仮に畑を洞窟一杯に広げたとして、面積はざつと60平方メートル。どうにか200キロくらいの収穫は見込める。魔法の森をはるばる捜し回り、魔法使用的に有望そうな菌株を吟味しているので、ここのシャグマアミガサタケの毒性は通常の5倍強。100グラムあたり700から800ミリグラムのモノメチルヒドラジンが得られるはずだ。

キノコ100キロからなら、なんとか数百グラムの燃料が得られる。効率を考えればこの半分がいいところだろうが、それでもこれをミサイルにぶち込んでやれば、魔法科学回路とやらの足しになるはずだ。

それでどれだけICBMが飛ぶようになるのかは正直もうわからない。

けど、どうにかしてやってみせる。魔法は気合いと根性だ。もうちよつと高尚に言い換えれば、魔法使いの精神性で、魔法の結果はいくらでも変わってくる。

いま、この魔界の果ての荒野で、キノコの材料と、空を飛ぶ魔法について、私より詳しいやつはいない。

だったら、私にしかできないことをやってやるまでだ。

「記録…魔界102日目」

ありつたけの肥料を魔界の土に混ぜて培養。すっかり利かなくなった鼻でもわかるくらいとんでもなく酷い臭いだが、これで生きた土ができてきている証拠だ。もつと臭くなるが、もう知らん。

結局、何一つ生命を見かけなかった魔界で、私自身がたくさんの微生物や菌を運んできた方舟だったってことだ。

菌床をなるだけ広げて水分を確保。飲み水の分も全部これに回す。この水を作る魔法がなかったら、私はとうに干からびて魔界の土だな。感謝するぜ、パチュリー。もうしばらく貸しておいてくれ。持つべきものは先達だな。

「記録…魔界108日目」

もう何回おんなじことを書いたかわからないが、呆れるくらい時間が遅い。何度も何度も菌株を眺めては、変化がないのを見て落胆する、その繰り返しで毎日が過ぎてゆく。そんなことやつてる暇は無いってのにな。

でもまあ、転送魔法の進捗状況の数字を眺めてるよりは、だいぶマシだ。目の前のシャ

グマアミガサタケがどう育つてどう増えるのか、その過程が私にはちゃんとわかる。何か間違えたとしたら、すぐに対処できる。こんなに心強いことはない。

暇を見て飛倉をの破片を調べ、通信方法を確認したが、やっぱり復旧は不可能だという結論になった。パチュリーの魔道書一冊でもあれば、強引に通信経路くらい作れたかもしれないが、無い物ねだりだ。

うん。借りてきた本はいつも持ってなきやだめだな。今後の方針の参考にしよう。

〔記録：魔界113日目〕

本日、第8菌床から子実体を確認。思ってたより小さいが、ちゃんとしたキノコだ。見事栽培に成功したことになる。やったぜ。

さて、続けて今日の魔理沙さんだ。ついに右手が動かなくなつた。魔力糸のバイパスを追加したが、捗々しくない。杖も用をなさなくなつて、どうにか地面を這いずるのがせいぜいだ。ついでに視界が両目ともだいたい悪くなつていて難儀するし、耳も怪しくなつてきた。もうとつくに目も鼻も頼りにならないが、あとはもう長年の勘でどうにかしてくしかないな。

大丈夫だ。私ならやれる。

〔記録・魔界117日目〕

早摘みのアミガサタケを使って抽出のテストを行う。といつてもろくな器具がないので抽出プラントは菌床を保存していたビンとそれに穴を開けた容器だ。こいつにぎつしり詰めた魔界の土がその要になる。

ギロミトリンとその加水分解物のモノメチルヒドラジンは水に溶けるので、収穫したアミガサタケを細かく刻んで、日向に出しておいて温まったお湯に突っ込んでよく攪拌する。このとき沸騰したお湯だと具合が良くないので温度には注意すること。

じつくり時間をかけてエキスを染み出させたら、丁寧にキノコとより分けて漉す。するとビンにはシャグマアミガサタケのキノコエキスが染み出した汁が残るが、この中に目的のモノメチルヒドラジンが溶け出していることになる。とはいえその濃度はお話にならないほど薄いので、これをどうにかして濃くしてやらなきゃならない。

濃度を濃くするには煮詰めるのが一番簡単だが、生憎とモノメチルヒドラジンは水と共に沸するので、沸騰させたら水と一緒に蒸発してしまう。ここが面倒なところだな。

そこでこの魔界の土の出番になる。さんざん私が煮え湯を飲まされた、細かな粉塵みたいな土だ。これを適当なボロ布で包み、二重にして瓶にぎつしり詰めた。

ここにゆつくりキノコ汁を注ぎ込んでやると、時間をかけてビン底の孔から、中身を濾された汁が出てくる。そう、飲み水の濾過でやるようなアレだな。

水がきれいになるってことは、キノコ汁の成分はこの魔界の土に吸い取られてるってわけだ。小麦粉みたいに細かい粒子の土には、その表面に細かな孔がいっぱい開いていて、これがいろんな汚れを吸着する。当然、目的のモノメチルヒドラジンもだ。

念のため、底から出てきた液をもう一回、上から土に注ぎ直す。その後さらにもう一回。何回も繰り返すほど、ろ過が繰り返されるわけだから、土に吸着するモノメチルヒドラジンは多くなる。終わったら次のキノコを刻んで同じことを繰り返す。これを数百回繰り返し、すっかり土中の目的成分の濃度が濃くなったところで、今度はアルコールを流してやる。すると、分配係数の差で今度はモノメチルヒドラジンがアルコールに溶け出して流れ出てくる算段だ。

こうやって、目的の成分を取り出せる。

アルコールはほととけば蒸発するので（蒸気圧もヒドラジンよりは低い）、口の開いたビンに入れておけばヒドラジンの濃度はさらに増す。最後に底に残ったものが目的物つ

てわけだな。……実際はもうちょいいろいろやってるが、基本はこれだ。

濃度が濃くなったモノメチルヒドラジンは酸化剤と混ざるだけで勝手に爆発する。扱いは慎重にならないといけない。ついでに言えば猛毒だが、まあ今更そんなこと言つてられないな。

ということで、今日までおよそ2日かけて、10グラムほどの目的物を手に入れた。これをあと30回ほど繰り返し返す。たいしたことは無い。瓶をたくさん使えば作業も早く進む。いつもやってることだ。いくらでもできる。すぐに終わる。終わらせてやる。

〔記録…魔界119日〕

抽出作業は継続中。予定の半分強が終了した。

今日はそれとは別に、ちよつとした作業をした。脱出時に関する積み荷の軽量化と、シヤグマアミガサタケの増産に関する進展が見込める。

いまの燃料の抽出作業は、もう片手だけで十分だ。すっかり慣れたし、扱いも問題ない。ということ、覚悟を決めて左手とは本日をもっておさらばすることにした。

どうせしばらく前から魔力系の操作も受け付けなくなつて、肩のところからぶら下が

ったまま、ぶらぶらしているだけで邪魔でしょうがなかった代物だ。見切りを付けるにはそろそろ丁度良い時期だろう。

重量の軽量化と、あらたな追加の栄養素としてはまあ、そこそこの妥当な換算だろうと思う。これでざっくり3キログラムくらいは軽くなつたし、菌株が溶かして養分にする足しにはなるはずだ。

〔記録…魔界126日目〕

今朝までに抽出作業の9割が終了。残りも今日中に完結する。

洞窟じゅうにあるシャグマアミガサタケは全部採り尽くした。それでもう、本当の本当に煙も出ない。

だから、明日には出発することにした。準備とか、荷物とか、そのへんはもうどうでもいい。そもそもどうしようもない。大陸間弾道ミサイルに括り付けられて、時速2万4000キロに晒されたら、多分そこで私は力尽きるからだ。死ぬかどうかは置いて、気絶するのは絶対確実だ。というか、意識があるとしたら12日間も超音速で加速に晒される拷問を受けているのと同じなので、それは御免被りたい。

だから、あとはICBMが予定通り飛んでくれることを祈るしかない。自動操縦や経路のインプットは済んでいる。済んでいるはずだ（信じてるぜにとり）。そのための用意は、きつとアリスたちが万事問題なくやり遂げてくれているはずだから。

ミサイルに括り付けられて発射のカウントダウンを終えたあとは——まあ、どう奇跡的なことがあっても、実況中継なんてしてる余裕はないだろう。

だからこれが、落ち着いて話せる最後の記録だ。

これまで、いろんなことがあった。私はとんでもない幸運の上に生かされてきた。それと同じくらい、自分の力で生き延びようとしてきた。次から次へと問題ばかりで、上手くはいかないことばかりだったけど、すべきことは全部やった。どれも、結果からすれば決して十分ではなかったかもしれないが、やりきった。

もうこれ以上、この洞窟で寝るつもりもない。4ヶ月を過ごしたベースキャンプだが、愛着よりも先にうんざりする。

まあ仕方ない。懐かしく思うのは、助かってからだ。

これで最後の記録も残した。私は今日——正確には今夜だが、作業が終わり次第出発するつもりだ——この魔界の果てを去る。

いいかげん、もうそろそろ、帰ったっていいころだ。

〔記録：魔界127日目 自動記録〕

さて、じゃあ出発するか。

見てろみんな。いまから帰るぜ。

〔記録：魔界127日目 自動記録〕

Code: "Don't Leave Me Alone, Daisy."

ICBM "mi-mi" Liftoff

〔記録：魔界127日目 自動記録〕

ぐおが、っ

いや まて これ

覚悟、してたが、この、衝撃は

しやれに、ならんぞ

〔記録…魔界121日目 自動記録〕
あ、が、ぐ

〔記録…魔界121日目 自動記録〕
しろい めが
くそ いたい

〔記録…魔界121日目 自動記録〕
みみが こまぐ
きずだ ひらいた ちが

そ
ら
が

終章

「幻想郷 第百三十五季 日と冬と土の年 霜月十二日」

こちら幻想郷。本日も晴天なり。

昨日からようやく起き上がりできるようになって、これを書いている。

気づいたらすっかり冬になっていて、ちよつとびびった。私の記憶だと、幻想郷はまだ夏になる前だったはずなので、どうにも時間の経過が飲み込めない。魔界の風景に季節がなさ過ぎるのが問題だよな。

あの後どうなったか、正直なんにも覚えていない。眼が覚めたときには永遠亭の病室だった。巡回に来ていた鈴仙のやつがものすごい顔をしてすっ飛んでいったところから記憶が始まっている。

助かった瞬間のことを覚えてないから、人生最良の日だって喜ぶことも、泣くことも笑うこともできなかった。そしていまのところ助かったって実感も湧かない。

なんだかなあ。

何度か——記憶の混濁で同じことを四、五回繰り返したらしいが、説明を受けたところによると、私を乗せたICBMは魔界文明圏の40万キロ手前で墜落していたらしい。それを見つけ出したのは、魔界の救助隊だった。

よく考えてみれば、690万キロの移動はミサイルですら12日間もかかるわけだ。魔界の首都圏からなら、大陸間弾道ミサイルの軌跡を発見し、事前に対策を打つことくらいはできたんだろう。

魔界神を説得してこれを派遣させていたのが誰かは、言うまでもない。

なんだかご都合で助かったみたいない気分だが、なんのことはない。私の発見を邪魔していたのは、幅200万キロにわたる魔素の枯渇地帯が原因だ。その外側に出ることさえしてしまえば、占術なり予知魔法なりで私の居場所を突き止めることは不可能じゃなかった。

あとは救助隊に拾われて、なんやかんやあって——具体的に何があったのかについてはいくら聞いてもはぐらかされるだけだった——まあ、おそらく知らないままのほうがいい方法だろう。なにしろ私の身体はすっかり元通り、人間のそれに戻っているわけだからな。

そう、すっかり元通り。人間の魔法使い霧雨魔理沙のそのままだ。

寄生していたナラクカケラの菌床や、力業で無理やり通した魔法糸も、きれいさっぱり除去されていた。治療されていうよりも、一から作り直された感じがしないでもないし、どうにも手足が自分のものじゃないような感覚も気になるといえば気になる。

単に寝たきりで身体が動かないだけが理由とも思えないが、この際無視する。どうせ永琳のやつに突っ込んだところで毒蛇だ。あいつ、患者相手に悪趣味なデタラメを平気で言いやるからな。

話を変えよう。

私が魔界に取り残されているうちに、幻想郷では半年が過ぎていた。

さぞ皆、寂しがつてるだろうと思っていたが、案外そんなものでもないらしい。

見舞いに来た連中の反応は、ちよつと風邪をこじらせて寝込んでたときのような反応だった。ずいぶん薄情な話じゃないか。霊夢からは年末の宴会の催促をされる始末。

まったく、病み上がりに好き放題言ってくれるもんだ。

あんまりにも、この幻想郷がいつも通り過ぎて、この半年間のことは、まるで何もかも悪い夢だったようにも思える。

けれど、壊れたまんまの八卦路はベッドの隣に転がっているし、帽子も箒も残ってい

ない。あの690万キロの荒野でたったひとり、生き延びた半年間は、間違いなく私の生の一部だ。それにどこまで現実感がなかったとしても。

せっかくの記録の最後をやるには、なんともつまらない結末だが、まあ、これも少しは身になるものがあつたかもしれない。

とりあえず——しばらくキノコは食いたくないな。

(魔界の人

了)

【あとがき】

初めまして。あるいはお久しぶりです。

サークル「折葉坂三番地」の銅折葉と申します。

このたびはお手に取っていただきありがとうございます。

本作「魔界の人」は、突然準備もなく人跡未踏の荒野に放り出された魔理沙が、知恵を絞って死力を尽くし、どうにかして幻想郷に帰ろうと奮闘する日々を描いた、本サークル83冊目の小説本となります。

元ネタは言わずと知れたアンディ・ウィアーの「火星の人」……マット・デイモン主演で映画化された「オデッセイ」のタイトルのほうでご存知の方も多いかもしれませんが、その原作小説のオマージュ的作品です。最初は秘封倶楽部の蓮子がアルファ・ケンタウリに取り残される話を考えていたりしましたが、科学考証がまったく追いつかなかったため、多少インチキで話が誤魔化せる魔法使いの話として魔理沙を主人公にすえました。

話のテーマとしては、霧雨魔理沙が極限状態で何を考え、どんな行動をとるのか、人間の魔法使いとしての彼女のキャラクターがどうあるのかを考えてみた作品でもあります。ひたすら彼女の独白が続くだけのストーリーですが、少しでも楽しんでいただければ幸いです。

今回の表紙ですが、これはNASAが利用可能素材として公開している、火星表面の山脈写真です。元ネタリスペクトを含めつつ、今作の魔界のイメージにということでお借りしました。

さて、紙面も尽きて参りましたが、そろそろ失礼いたします。

また次の機会にお会いできることを願って。

【奥付】

「魔界の人」

発行日 令和3年3月21日
博麗神社例大祭

発行 折葉坂三番地
(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

本文 銅折葉
kurogiri2@gmail.com
Twitter : @domioriha

表紙 NASA Image and Video Library
(<https://images.nasa.gov/>)

印刷所 株式会社ポプルス

※本書の内容はフィクションです。実在する人物、職業、
団体、地名、制度などとは関係ありません。

本作は「上海アリス幻楽団」様の「東方 project」の
二次創作です。



<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>

折葉坂三番地

2021.3.21 博麗神社例大祭18

魔界への短期留学——。夏を前に始まるはずだった霧雨魔理沙の新生活は、転送魔法陣の事故によって悪夢へと変わった。魔界の果て、人跡未踏の荒野に放り出された魔理沙は、水も食料もなくなつた一人で生き延びることを余儀なくされる。最も近い魔界文明圏までの距離690万キロメートル。不毛の大地に取り残された少女は、博く麗しき幻想郷へと帰り着くことができるのか。戦慄のサイエンス・マジカル・サバイバル開幕。

印刷所：株式会社ポプルス